令和４年度文化庁委託事業

「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」

（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）

報告書

令和4年度文化庁委託事業
「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」
（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）報告書

目次

第１章 事業概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 03

第２章 事業報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 07

2-1 第１回検討委員会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 08

2-2 現地実態調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

映画資料の所在に関する情報収集（北の映像ミュージアム）・・・・・・・・・ 15

映画資料の所在に関する情報収集（札幌映像機材博物館）・・・・・・・・・・ 19

映画資料の所在に関する情報収集（TOHOスタジオ）・・・・・・・・・・・・・ 21

映画資料の所在に関する情報収集（東宝映像美術）・・・・・・・・・・・・・・ 23

映画資料の所在に関する情報収集（世田谷文学館）・・・・・・・・・・・・・・ 25

映画資料の所在に関する情報収集（東京現像所）・・・・・・・・・・・・・・・ 30

2-3 実証展示（調布地区における資料展示）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

2-4 デジタルアーカイブ実証研究（デジタル展示）・・・・・・・・・・・・・・・ 38

2-5 映画資料所在地情報検索システム（JFROL）の連携拡大と一般公開 ・・・ 43

2-6 全国映画資料アーカイブサミット2023報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

2-7 第２回検討委員会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

第３章 事業総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

第１章　事業概要

【実施概要】

第１部 : 事業の目的について

本事業は、歴史的・文化的価値のある我が国の貴重な文化関係資料が散逸・消失することのないよう、アーカイブの構築に向けた資料の保存及び活用を図るための望ましい仕組みの在り方について調査研究等を行い、映画関連の非フィルム資料（= 映画資料）のアーカイブに係る中核拠点の形成を図るため、当該分野のネットワーク化を推進することにより、分野全体のアーカイブの構築・運営や共同利用の促進等を行う。

第２部 : 事業内容について

(1) 検討委員会の設置・運営

非フィルム資料のアーカイブ中核拠点の形成のため、文化庁と協議の上、検討委員会を設置し運営を行う。委員会においては本業務で取り組むべき課題の抽出や方針、非フィルム資料の利活用方法等、事業実施における助言等を行う。委員は映画関係者、学識経験者、学芸員などから５名以上を選任する。委員会は年２回の開催を予定しており、必要に応じてオブザーバーの参加者を加える体制を整える。専門分野における課題が生じた場合は必要に応じて分科会を別途実施する。

(2) 調査研究の実施

令和４年度（2022 年）は、調査地域を北海道地区に拡大する。また関東地区も対象とし、新規に世田谷地区及び令和３年度（2021 年）に続いて調布地区にて、非フィルム資料の所在等を調査する。また、非フィルム資料に係る所在情報及びデータベースの管理・運用・利活用等の調査研究を実施する。

①非フィルム資料の所在に関する情報収集

Ⅰ．北海道地区の所在調査（現地実態調査）

地方の非フィルム資料所蔵館との連携を深めるべく調査地域を拡大し、北海道地区における非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。北海道の北の映像ミュージアム等を対象に、データベースの有無も含めて所在情報の収集・調査を行う。

Ⅱ．関東地区（世田谷、調布地区）所在調査（現地実態調査）

関東地区における非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。東京都・世田谷地区の世田谷文学館等と、昨年度から継続して東京都･調布地区の非フィルム資料所蔵施設を対象に、データベースの有無も含めて所在情報の収集・調査を行う。

②非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討

Ⅰ．映画脚本のデジタルアーカイブ化による保存と利活用の実践の検討

映画資料の保存と利活用のために、映画脚本のデジタルアーカイブ化を検討する。協力所蔵施設内の映画脚本の中から貴重性や状態等によって検討した資料を対象に、劣化進行前の状態の画像データを保存し、所蔵施設内でのデジタル閲覧を可能にするデジタルアーカイブ化を検討する。

Ⅱ．実証展示開催の検討（東京都内）

利活用実証実験として、調査で発掘された資料を通じ、日本映画文化の一面を紹介する実証展示の開催を検討する。昨年度に続く調布地区の追加調査結果や、世田谷地区の調査結果等を元にした資料展の企画を通じて、資料の展示方法や資料所蔵施設同士のネットワークの推進等を検討する。

③非フィルム資料等の“所在地情報検索システム”の管理運用及び効果検証

令和２年度事業にてベータ版の限定公開にて運用している「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」を一般公開する。

④所在地検索システムを活用したデジタルアーカイブの実証研究所在地検索システムを活用したデジタルアーカイブ実証研究

「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」に連携している京都府の東映太秦映画村・映画図書室と東京都の松竹大谷図書館及び川喜多記念映画文化財団のデータベースに加えて、福岡県の松永文庫や東京都の早稲田大学演劇博物館を候補として１、２館の連携を検討する。各資料館の参加難易度・優先度を調査し、連携館及び利用者の拡大を目指す。

（3）成果報告

調査研究の成果をとりまとめ、文化庁へ報告するとともに、その内容を公表する。また、非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員等による非フィルム資料のアーカイブ化に関する「全国映画資料アーカイブサミット 2023」（仮称）を開催し、国内ネットワークを拡大する。サミットの会場は、フィジカル開催の場合は東京都内を想定し、広さは最低でも 100 名が参加できる会場を確保する。

①全国映画資料アーカイブサミットの開催（東京都内 or オンライン）

令和３年度事業として実施された「全国映画資料アーカイブサミット 2022」において構築された非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員の昨年度からのネットワークの拡大・深化、及び提起された課題等の議論、「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」の連携拡大を目的として「全国映画資料アーカイブサミット 2023」（仮称）を 2023 年１～２月（予定）に開催する。セミナー・シンポジウム等を実施して相互理解を深める。

【参考】令和３年度「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」業務内容

①非フィルム資料の所在に関する情報収集

・中国・九州地区の所在調査（現地実態調査）

・関東地区（調布地区）所在調査（現地実態調査）

②非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討

・映画資料特別展開催（調布地区、京都地区資料）

・デジタルアーカイブ実証研究（デジタル展示）

③非フィルム資料等の“所在地情報検索システム”の管理運用及び効果検証

・JFROL の管理運用及び効果検証

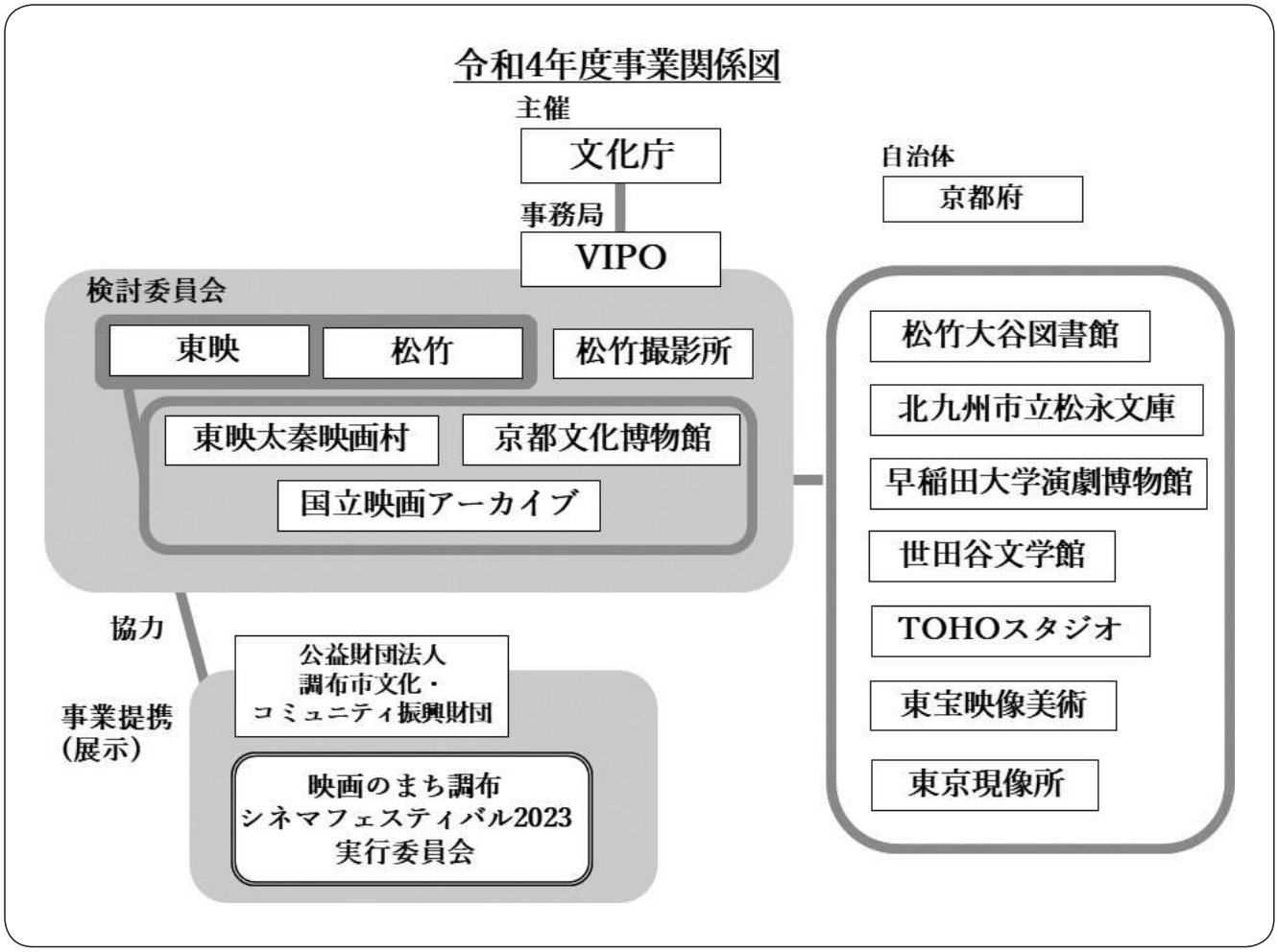
・JFROL を活用したデジタルアーカイブ実証研究

④成果報告

・「全国映画資料アーカイブサミット 2022」の開催

第 3 部 : 事業関係機関について

非フィルム資料のアーカイブに係る中核拠点の形成を目指し、産学官が連携して非フィルム資料の所在情報の収集と映画資料の活用に取り組む。



第 2 章　事業報告

第１回検討委員会　議事録

【日程】令和４年７月15日（金）
【場所】オンライン

【出席者】
検討委員：
岡田　秀則（独立行政法人国立美術館国立映画アーカイブ主任研究員）
森脇　清隆（京都文化博物館 映像文化創造支援センター長）
河西　央　（株式会社東映京都スタジオ管理部長）
小林　俊正（東映株式会社 経営戦略部長代理兼コンテンツ事業部映像資産管理室）
永島　聡　（株式会社松竹撮影所取締役京都製作部長）
板倉　史明（神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）
木下　千花（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）

オブザーバー：
山口　記弘（東映株式会社経営戦略部フェロー）
梨田　日色（東映株式会社　事業部映像資産管理室長）
御厨　千晶（京都府 商工労働観光部 ものづくり振興課）

文化庁：
吉井　淳　（参事官（芸術文化担当）付参事官補佐）
戸田　桂　（参事官（芸術文化担当）付芸術文化調査官）
岩瀬　優　（参事官（芸術文化担当）付映画振興係）
奥山　寛之（参事官（芸術文化担当）付メディア芸術発信係）

事務局：
特定非営利活動法人映像産業振興機構
三村朋之　（株式会社角川アスキー総合研究所経営管理部 主任研究員）

岡田：これまでの事業の蓄積が徐々に実りを生みつつある状況であると考えております。映画の製作資料といえば東京と京都、関東と関西が中心であると考えてしまいますが、「映画作り」という枠を超えてより一般的に映画資料を考えた時には関東・関西以外の場所でも非常に豊かなものがあります。ローカルな地方の映画文化の振興という意味合いでは、昨年度の調査地区として下関や北九州方面といった西日本に展開できたことは、事業成果として大きかったと思います。従って今年度の北海道への展開は非常に意義があると考えております。とりわけ北の映像ミュージアムは、展示施設がなくなりやや苦境にある中でどう映画資料を活用できるかを考えるテストケースとして大きな意味を持つと思っております。同館はまた、北海道ロケを行った日本映画の調査や出版活動などのいろいろな取り組みをなさってきているので、映画資料を通じた文化の活性化という観点でもこの調査は役立つと思っております。そして映画資料所在地情報検索システム（JFROL）の一般公開も非常に意義のあることと考えております。付け加えて、実証展示についても、昨年度の調布の展示では例えば東宝の助監督会所有の戦前から戦中期の日誌など、これまで視野に入ってこなかった貴重な資料が展示されていて、実際の資料発掘にも役立っていることを目の当たりしましたので、引き続き期待しております。サミットの中身については今後の議論が待たれますけれども、全般的にはこの事業計画でよいと思いました。

森脇：全般的な動きについては、この調子で進めていただけたらいいと思います。岡田さんの話に乗るかたちになりますが、例えば地域の映画館の持っている資料は、映画がどう愛されたのかという需要の歴史を物語るだけに留まらないものです。「地域にある映画館で感動した」、「その映画館があることによって人生が変わった」など、映画館があるということ自体が地域にすごく影響力があります。例えば実証展示で、その映画関係の資料をどのように地域で活用すれば、その映画館の歴史や地域のアーカイブとして愛されるものになるのかというヒントを示すことができれば、それぞれの地域で映画資料の活用が進んでいくかもしれないということを少し思いました。

また、脚本のアーカイブについては、どういう利

用者が想定されるのかを整理していく必要があると思います。つまり研究者なのか、脚本家なのか、あるいはもっと幅広くアニメやゲームやいろいろな作品で利用される方たちなのか、あるいは海外の方なのか。その利用する方によって、どうアーカイブすると便利に利用してもらえるのかということを考える必要があります。研究者は放っておいても利用すると思いますので、できたら今の制作者が利用しやすいデータベース化をお願いできたらと思います。

そして脚本には、脚本家によるいわゆる普通の脚本としての脚本と、映画監督やカメラマンの書き込みがしてあるものと、2つの大きな系統があります。単にその文字情報としての脚本と、その書き込みによってある映画人の映画撮影時の創作性が伺い知れる脚本は、本当に違う資料といってもいいかもしれないので、その辺りも含めてご検討いただけたらと思います。

河西：まず、今期の事業計画に関して、資料の調査の実施については、当社（東映太秦映画村）を取り上げていただいた初年度の京都にはじまり、それから関東、中国・九州地区と広がりを見せ、今年度は北海道まで対象地域が全国的に広がることは、大変結構なことかと思いました。また地域別に限らず、会社別に見ても東映があり、角川大映（現社名：KADOKAWA）があり、日活があり、そして今年度は東宝も対象に含まれるということで、これも線から面の展開になり、大変充実してきていると感じました。

次に利活用に関しては、過去映画村では2回ほど実証展示を行いましたが、一般の方との接点をどう設けて映画文化を認知してもらうかが大事なので、これも継続していただけたらと強く思いました。そして、JFROLにつきましては、当初から映画村のシステムをつないでいただいておりますが、今年度一般公開を目指されるということで、またこれからどんどんその対象施設を増やすことも大事かと思います。より一般の方向けの改修と対象の施設を増やすという2つを目標にして取り組んでいただけたらと思いました。

小林：今回新しく参加しております小林です。先日前任の堀口からの引き継ぎも兼ねて京都の東映太秦映画村に行ってまいりました。東映太秦映画村の映画図書室は、2年前から閲覧のための一般公開をしています。実際に保管物をつぶさに見ますと、戦前の映画の貴重な脚本であるとか、あるいはポスター、スチル写真等かなりの点数が大事に保管されておりました。ただ、せっかく整理が進み保管しているこの大事な資産に関して、場所の問題等もありますが、一般により広く利用してもらうためにはどうすればよいのかということは課題だと思っておりました。

今期はその事業計画の中の映画脚本のデジタルアーカイブ化に関しての取り組みに非常に興味を覚えています。ただ、先ほど森脇さんからもお話があったように、デジタル化した資料を誰に見せるのかを考えるのは必須課題かなと思います。シナリオといっても、いわゆる映画の構成要素の一つのシナリオと、実際にその監督やスタッフがいろいろなメモをしているようなものは、それぞれ興味を示す方が違うと思いますので、それぞれのユーザーに向けての見せ方も、今後はそのデジタル化する上で考える必要があると思いました。

それからこれもさっき話になりましたけども今期調査エリアを北海道まで広げたというのは非常にこれからも期待が持てることだと考えております。

永島：どうぞよろしくお願いいたします。また今年もJFROLなりデジタル化などで松竹大谷図書館がどう絡んでいくかというのは追ってお知らせいただければと思います。

それから、皆さんとは異なる制作の立場で申し上げると、今非常に映像制作が節目のタイミングになっているのではないかと思っています。経産省による映画、映像制作の適正化の動き、それから是枝監督がさらにその先を行くような発想で提言をされていたり、そしてハラスメント問題がニュースを騒がせたりなど、映像制作現場の転換期が来ているかと思います。

一方で配信プラットフォームが充実して、旧作を見るチャンネルが実は増えている面についても、何か映画文化、映画産業の転換期を感じています。そういった映画の価値のようなものが高められる機会にこういう場をしていただきたいなと感じている次第です。

板倉：まず、資料調査につきましては、今年度は北の映像ミュージアム、世田谷文学館を対象にさらに拡大するということで非常に楽しみにしています。

資料調査についてこういった場では何かその新しいご提案することも大事かと思いました。昨年度は現像所も調査をされてさまざまな成果があって素晴らしいと思いましたが、例えば映画制作の中で録音の作業があるとすれば、撮影所の中や外にある録音スタジオなどに、何かこれまで知られてなかったような録音や音声に関する資料があるかもしれないと考えられ、今後の検討の材料として調査施設として録音スタジオなども一度ご検討いただければと思い

ます。

また、JFROLについて一般公開することは非常に大きな展開だと思いますので、公開されたときには何かメディアなどで取り上げていただければアクセス数などが伸びると思いますし、昨年度のJFROLの作業の中で複数の異なる機関で管理していた情報をJFROL独自の資料カテゴリーに統一してまとめ直して公開するという成果があったと思います。そのように毎年少しずつ新しい課題を見つけて解決や改善していくことは非常に素晴らしい事業だと思っています。機関同士のデータ管理に違いがあったのでこういうところをより良くしましたというふうに、ぜひ一つでも課題設定をして、クリアしていただけると非常に成果として分かりやすい部分になるだろうと思います。

そして、サミットについては、昨年度のサミットのコメントの中で権利処理はこんなに簡単じゃないぞといった批判的なコメントがあって、それがずっと気になっているのですが、そのことについても専門的な立場からの意見を聞きたいと思いますし、権利処理についてやはり多くの参加者が興味を持っていましてその関係や、より踏み込んだ内容のセッション、議論などをサミットの中に加えるということは現状の参加者のニーズに沿ったものと思います。

木下：北海道にまで調査地域が拡大していることと、それからJFROLの一般公開によってその成果が一般に広く還元されることは、本当に感慨深く思っております。板倉さんがおっしゃっていた録音スタジオについても、ぜひ調査していただければと思います。また私自身はずっと脚本を資料として使うということを研究者としてやってきたところがあるのでこの脚本のデジタル化という、「デジタルアーカイブ化による保存と利活用の実践の検討」には非常に研究者としても興味がありますし、一方でいかにその権利処理が難しいかということも作り手の方のお話も含めていろんなところから聞いたことがあります。アーカイブでも一番難しいのがこのとりわけ書き込みがある脚本ですが、資料的価値の高いものなので、非常に期待しています。

それから、もう一つは永島さまからもありましたが、私は映画業界における性被害について最近声明文を発表したりしています。それが何か悪いことやネガティブなことではなくて、これによってより一層日本映画の伝統に光も当たりますし、改善してより関心も集め、またよりパワフルになっていくための一つのステップであろうと信じています。

それと関係して言いますと、この非フィルム資料の公開で、一番面白くて関心が集まるのは、例えば制作に関わる脚本や衣装のデザインであると思います。世田谷文学館で東宝に関するそういった貴重な脚本などを見せていただいたこともあります。一方で、その制作現場などの製作のプロセスで、例えばどう契約が行われていたのかというようなことにも昨今の性被害の問題を通して益々関心が集まることだと思います。そうした製作プロセスに関する人事や給料などのさまざまなことについても可能な限りでアーカイブの一部と考えることができれば、さらに刺激的な映画史研究にもなりますし、今後を考えていくのにも助けになるのかなと思います。

■自由討議

岡田：脚本という資料は、いわゆるノンフィルム資料の中でもやや特殊な位置にあり、要するに映画を作った会社とはまた別に、シナリオ作家の方々の権利も大きいです。シナリオ作家の方々が、映画とはまた別に独自の権利をお持ちであることから、その円滑な利用にはそういった方々が加盟している脚本系の団体、映画だと主に日本シナリオ作家協会、そして日本脚本家連盟などとの関係が大事になります。従って、こうした資料をいかに活用するのかについて事前にしっかりと説明できるようにしておくことが、やはり大事でしょう。

私が会議に参加している日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムは、10年ほどの活動の歴史がありますが、放送界の、つまりテレビを中心にラジオも含む放送台本のアーカイビングに力を入れている団体で、そこでは脚本家団体や個々の作家の方々の了解をしっかり得ながら進めているという印象を持っています。その中で例えば教育目的であったり、あるいはWEBサイトを作ったりするなど、事業説明をしながら了解を得ていく流れを作っていらっしゃいますので、日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムへのヒアリングはこちらにも役立つかと思います。

元々このコンソーシアムは1980年以前のテレビ番組映像自体の保存ができていなかったことから、脚本だけはきちんと残さねばならないという考え方をお持ちで、映画の場合は、フィルムの残存が少ない初期や戦前期の作品は別ですが、映画自体が存在しかつ脚本も存在するというのが基本かと思いますので、むしろ研究のためのリソースという一面が大きいかと思います。

またもう一つ、脚本の場合はまっさらな脚本もあれば、それを持っていた方の書き込みが多いものも

あります。それは映画の生成過程を知るために役立つ一方、プライベートなことが書き込まれていたり、個人名や電話番号が書かれていたりするものもありますので、このあたりの公開には繊細な難しさがあることを実務的に予想しなければいけません。一度私はアメリカの映画図書館員会議というものに出席して、アメリカの図書館の皆さんがそういった書き込みのある資料をどこまで公開していいのか、法的にどうなのかなど、議論し合っているのを見まして、先駆的なアメリカでも相当な苦労をなさっているのだと分かりました。

森脇：今の脚本の話に関しますと、「映画『羅生門』展」の時の課題として、書き込みや貼り付け、カット尻が貼り付けてあるような脚本をスキャンする時に、それらを剥がしたり、あるいはかなり劣化した脚本で喉の部分が割れていて、その喉のぎりぎりのところまで書き込まれたりしているものもありました。そういったものを過去に何パターンか扱ったのですが、極端な話、全部のページを剥がしてスキャンした後に、例えば製本業者や表具屋に戻してもらう方法もあり、スキャンした後の一次資料をどこまで戻して保存するかという問題があります。留めてあるクリップを剥がすのか剥がさないのか、セロテープをどうするのかというようなことなど、かなりいろいろなやり方があります。私もこれが決まりというやり方はきっとないと思います。それからスキャンしたデータについてもある程度これがスタンダードというようなものが、本当は何パターンかできたらいいなと思います。これはPDFファイルでいいのか、あるいはそのPDFファイルで、内容が重なっている部分や書き込みなどをどう連携していったら、使いやすいのか。この辺りも含めて保存ファイルも問題かもしれません。

事務局：研究者の方の目線からすると、その物としての貴重性よりも、中身の研究で映画と完成台本とのギャップだったり、初稿、第二稿、第三稿とあった場合の比較の問題だったりなど、いろいろな観点からアプローチがあるかと思います。映画脚本は一筋縄ではいかない映画資料なので、どうするのが一番いいのかは、皆様のご意見をいただきながら進めていければと考えています。

　また、森脇様が先ほどおっしゃった地元の映画館の歴史や大切さは、その映画館だけでの体験だけではなく、住民の郷土史になっている側面もあるかと思います。大体映画館は、昔は決まって繁華街にありました。それをもっと地元の郷土史博物館や図書館等を通じて、その重要性や貴重性、有用性について利活用していくことも考えられます。

森脇：実証展示という時に、発想をちょっと変えて、例えばその北海道でのこの地域での映画資料を基にしたその地域の歴史や文化が分かるような、こう活用したら映画資料が地域の歴史を楽しむのに効果的だという展覧会を一つできるとよいのではないでしょうか。当館でもそうなのですが、外部の方から、ここの地方でも実はこういう映画の資料があるなど、映画館がこれ以上自分のところで保存できないものをどんどん送ってくれたりします。80年代、90年代を含めての地域のちょっと生々しい映画資料を置いている博物館や資料館は結構あると思います。アカデミックな実証展示もいいですけれども、その地域に依ったマイナーなものも検討できたら面白いかもしれません。

事務局：ある地域を舞台とした映画の資料を地元にあるものだけでなく、そこに少し色付けしたい時にJFROLを使っていただいて、地域でロケした映画資料の収蔵先を探して、それを借りて一緒に展示する

ことで厚みや幅を出せることも考えられます。

岡田：映画館の資料という観点では、今、実は国立映画アーカイブの展示室では「日本の映画館」という展覧会を行っていまして、かなり評判がいいので、映画館という場所の歴史的な再検討の機運が、学術的あるいは社会学的、郷土史的にも来ていることを実感しています。例えば、東京にせよ大阪にせよ、大都市の私鉄沿線の小さな駅にも昔は映画館が普通にありました。しかし、今では大きな繁華街にしか映画館がなくなってしまい、実はかつて地元の駅前に映画館があったことを若い方はもうほとんど知らないし、それを知る機会もありません。あるいは地方都市の小さな町でもちゃんと映画館はあったことを意識するのも難しいと思います。ですから、そういう映画館資料を通じて、幅広い世代の方にもっと映画を身近に感じてもらえるのではないかと思います。実際に展示活動を行っているところも結構ありますし、それぞれの場所でより熱心に掘り起こされるべき文化かなと思います。例えば、映画館文化への関心の高さの一例として、「消えた映画館の記憶」という WEB サイトがあります。愛知県に在住の個人の方が作っているものですが、愛知県に一番詳しいとはいえ、北海道から沖縄までの全国それぞれの映画館がいつ始まりいつ終わったかを文献的に徹底して調査していて、実証性が高く役立つサイトです。映画館の開館年や閉館年、館名の変遷も引用文献名を付けて書いてあるので、ソースという意味合いでも意味があります。そんな状況もあり、映画館はいま主題としてより大きな意義を持ちつつあると思います。

木下：映画館の研究が研究者としても非常に進んでいて、ここ２～３年盛り上がりを見せています。早稲田の演劇博物館などにたくさんのプログラムが収蔵されていて、その他神戸映画資料館にもあります。おそらく捨てられているものも沢山あると思うのですけど、全国でそういった地域のなくなってしまった映画館などのプログラムがあれば、例えば JFROL で将来的に取り込んでいくことを考えることもできるかと思います。また先日表象文化論学会で映画館についての発表で聞いたのですが、研究のためにプログラムをどう整理するかは非常に大きな問題で、それらを作品にひも付けて整理しないと研究が難しいなど、そういう意味でも興味深い資料だと思います。この映画館と作品の接点というか、作品に還元するというのではなくて、どういう映画が例えば静岡県の袋井市ではいつ見られていたなどそういうことが分かったら面白いと思います。そして、本事業との関わりも作っていけるのではないかなと思いました。

板倉：まず、これまで議論になっていた脚本の利活用についてですが、岡田さんがおっしゃったように、これまでテレビ業界などその先行のプロジェクトや成果や分かったことが既にあると思いますので、そういったものを活用しながら、映画の脚本資料についてどこまで公開可能なのかというノウハウを、今年度の調査や公開の交渉の中で蓄積して、一つの成果にするということはあり得ると思います。つまり、結果的に公開できなかったものが多かったとしても、その中で蓄積された公開までのノウハウやハードル、条件などが明確になると思います。それが共有できれば今後活用する時の一つの指針になると思いますので、結果的に一部分しか公開できなかったとしても十分価値があって、今後多くの方が参照するような成果になるのではないでしょうか。もっとも、仮にその脚本の著作権がその著作者の死後 70 年だとしたら、戦前や終戦直後の作品の一部は公開可能なものがあるかもしれませんし、時代をさかのぼって考えれば著作権的に公開が可能なものはいろいろあるのではないかと思います。その条件などを整理して、こういう条件で公開できますということが多くの方に知られたら今後の利活用につながる、それも成果だなと思いました。

また、ぜひこの機会なのでお伺いしたいのですが、先ほど録音スタジオと申しましたが、私は全く現場のことを知らないのです。東映や松竹の方にお聞きしたいのですが、例えば録音関連の資料がこういった場所に保管されているかもしれないとか、そういった情報は何かございますか。あるいは、録音に限らず何かこれまで全く気にしてなかったけれども、こういった場所にこういう資料があるかもしれないといった可能性があれば今後の調査場所の開拓につながると思います。もしよろしければ教えていただければと思います。

永島：松竹京都撮影所の場合、仕上げをする作品がテレビ作品ですので、テレビ作品の状況しかお伝えできないのですが、MA までの作業でいうと音関係の職人たちの書き込みがある資料は存在しています。ただ、やはりスペースの問題で、実はここ５年ぐらいかけて今日欠席の映像アーカイブ室の井川とフィルム系の中間素材であるとか、作業用の素材を中心に整理に着手しており、実はだいぶ処分しております。産業としてはやっていかざるを得なくて、皆さんには申し訳ないという思いです。また、ノンフィルム素材として台本等々は存在していますが、物体

としての台本はその職人の私物的な意味合いも含んでいる実態があります。現実的には個人に紐づいて各所に散逸している部分もあるので、なかなか取り扱いが難しいなと思います。テレビ作品の事例のため、参考になるかはわかりませんが、権利的な問題などのハードルもあるでしょうが、掘り起こせる可能性、活用される可能性はあるのではないかと考えています。

河西：以前私が勤務していた京都撮影所がリニューアルする前に、録音関係の作業を一括して行う技術会館という建物があり、そこにいろいろと過去の資料、白黒映画からテレビ作品に変わっていった時期のもの、例えば録音用の35ミリと16ミリのネガフィルムや、6ミリの録音テープなどが大量に保管してありました。ただ、何年か前に技術会館を取り壊して、同じ敷地内の別の所に録音と仕上げ関係の資料が移動してしまいました。別途本館っていうところがあって、本館の中には編集作業するスペースがあったのですが、そこもリニューアルで新しい敷地内の建物に移動しました。松竹さんと同じく当社も撮影自体は京都でするのですが、仕上げ自体は東京の練馬にある東映デジタルセンターにてオンラインでするかたちになっています。そのため、そのリニューアルの時に古い資料は処分してしまった可能性が高いです。映画制作資料に関しましては、その録音関係や、編集関係、そして撮影関係の資料など撮影の本拠地自体は昔から変わってないのでそういったものは残っている可能性はあります。それから制作全般に関わる資料であったり、演技事務回りや、そういった昔の東映の全盛期の俳優動静の資料であったり、そういったものはまだある倉庫のある一画の所に保存してあるかとは思いますが、それらが今どういった状況で保管・保存してあるかは分かりません。その他、映画の予算書に関しては、テレビドラマに関しては法定の経理指導の扱いで、7年間の経理資料の保存期間を過ぎたものは廃棄処分しましたが、映画に関してはある時点まで、昭和30年代の予算書などもある一定の時まで残していたのですが、これも所内を整理していく中で昔のものは廃棄している可能性があります。大体京都撮影所、東映の京都撮影所の現状はこのような状態になっています。

木下：その録音のテープは、北浦寛之さんや長門洋平さんが国際日本文化研究センターにいる時に引き取るっている噂があって、何か部分的にはどこかに寄贈されたものもあると思うのですが、いかがですか。

山口：技術会館には、『仁義なき戦い』の時代の作品を含めて、大量に音源テープがありました。これらを何とかしたいということで日文研さんに話をしてもらったのですが、結局引き取れないという話になりました。最終的にはある程度は本社の映像版権部が使えるものは引き取るといった話で持っていったようですが、大量な部分は処分したと思います。その辺は撮影所の録音の部署でやったので、その後の行方は分からないのですが、東京である程度持っていったという話は聞いています。今回東映の組織がだいぶ変わり、今までアーカイブスクワッドという所が今度コンテンツ事業部という要は版権営業の部分の一組織として再編されました。検討委員として出席している小林がそこに所属しており、その責任者がオブザーバーでいる梨田です。その辺りの東映の本体の中でどこに何があるのかというのをまた調べてもらったらいろいろ分かってくるかもしれないという気はします。先ほど河西が申し上げた倉庫の中の資料については、倉庫内が汚いのですが、時間があるときには開けております。古いものは昭和27～8年ぐらいからのものもありまして、いずれは整理したいなと思っています。

事務局：その辺の資料は、文化遺産でもあり産業遺産でもあるということで、現場の人からすると取り扱いに難しいところがあるのではないでしょうか。

山口：そうなのです。スペースがやっぱり最優先されることがありまして、それでも何とか残していきたいと思います。例えば昭和30年ぐらいの当社の撮影所の図面などがあるわけです。ここにこういった建物があったということや、今、俳優会館が建っている裏側に馬小屋があったということなど書かれている資料があり、非常に貴重だと考えています。

話は変わりますが、今回東宝さんのほうに調査に行かれるということを、楽しみに感じています。松竹さんと東映とはいろいろな面でお付き合いあるのですが、東宝さんはちょっと縁が遠いところがあり、その周辺の方にぜひ今後参加していただいて、委員にもなっていただくような動きをしてもらえればと思います。できれば、日活さんや大映（現社名：KADOKAWA）さんも含めて映画会社各社さんの人に参加してもらって、現在どうなっているかという実態をそれぞれの会社の中で調査してもらったら非常にいいと思っております。

昨日僕は東京衣装の川田社長のところにインタビューに行きました。あまり衣装のことは知らなかったのですが、川田社長も三代目ということもあり映画衣装について非常に詳しいし、調布のお祭り等にもいろいろ参加されたりして、文化的な面に関して

も積極的に関わっていらっしゃることもありますし、ぜひ映画衣装等も今後調査するとよいと思います。実は昭和32、33年まで松竹さんの衣装は、全部東京衣装さんがやっていたと聞きました。そこで松竹衣装さんができて、そこからは松竹衣装さんになったという話を昨日お伺いしていたのです。松竹さんも松竹衣装さんはずっと歌舞伎で、それまでは大船とかあの辺も東京衣装さんがやっていたということもありますし、貴重な衣装がありそうな気がします。

森脇：先程の録音に関する話題ですが、音素材はおよそ3つに分かれていると考えていまして、1つが音楽や音源、次に後ろがサウンドトラックやオリジナルサウンドトラック、そしてその間の中間素材。最初の音源は、エフェクトをかける音響監督の方が個人的にお持ちか音響スタジオが収蔵していたり、また音楽については、音楽家やスタジオが収蔵したりしていると思います。中間素材以降がダビングルーム以降の作業で生じるので、映画会社がどこまで権利を持つのか明確でないところです。例えば当館では倉嶋暢さんという大映の音響制作の方の資料が入っている6ミリテープを収蔵しています。それは倉島さんのお宅に行って、押し入れから全部頂いてきました。ですから、そのあたりの資料は、権利元ごとなどに分けたら、どこに今置いてあるのかということは考えやすいかもしれません。

岡田：今年度の現地調査で対象の北海道地区に関して、つい先日まで登別市にあった映像機材博物館が春に札幌に移転して、6月中頃から札幌映像機材博物館として開館していると同館のホームページにあったのですが、あまり資料の種類の風呂敷を広げてしまうのもなかなか大変とはいえ、ここを調査しないのはもったいないだろうとは思っています。日本で映像機材専門の資料館は非常に少なく、かつて東京のカメラレンタルのナックイメージテクノロジーが展示空間を持っていましたが、今も保存は続けておられるとはいえ、一般には見ることができなくなりました。それから、最近では東京飯田橋のギンレイホールが成田市で映写機コレクションを保管する施設を設立されて、注目していますが、この札幌の方は自らが撮影技師であり、自費で博物館を設立し無料で公開していて、しかもほとんど動態保存、いわゆる博物館でいう動かせる状態で保存しているそうで、熱意が並々ではないと感じますので、調査の対象にできればと思っております。

文化庁：皆さま、今日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございました。今日はどこに映画資料が他に眠っているか、どんな映画資料も活用ができるかというかなり踏み込んだお話も皆さんから聞けたと思います。この事業も昨年は九州、福岡というところに広がり、今年度は北海道という広がりを持つことで、これで日本の全国にある程度調査を広げられたのではと考えており、全国という点で1つの達成を今年度でできるかと思います。先ほど委員の方のお話にもありましたが、映画作品そのものは京都と東京を中心に作ってきたということがあり、大きな拠点としては京都と東京になりますが、映画資料の広がりという点では全国に映画館があり、また撮影も様々なところで行われているので、映画資料そのものはこの2つの都市だけではなく、全国にいろいろなものがあると思います。また、そこにある資料はその地域にあることに意味があったり、そこの町の郷土資料館で有効にそれを展示できたりすることで、地元の人たちが見に行くというお話が、森脇さんからもありましたが、また新たにその地域の子どもたちであったり、若い世代の人たちに身近で見てもらえるチャンスが広がると思います。永島さんからもお話のあった配信という時代が到来して旧作を見るチャンスが実際かなり増えていますから、そういったところで次の世代の人たちも作品にも触れ、過去の映画館や映画の資料などにも触れられるチャンスが得られれば、映画文化全体をより文化として認知してもらうことにもつながるかなと思っています。また皆さんからは、脚本の話が出ましたが、研究者の方たちの中で検討していただくこともあるでしょうし、その利用の点では、この事業は中核拠点を形成するモデル事業ですので、その中でできる範囲とやや超えてしまう部分があります。踏み込んだ部分についてはそれぞれ皆さまのご自身の研究などでも発展させていただければと思います。アーカイブサミットでは皆さんで論点を見つけていただいて、サミットだけにとどまらずにいろいろな学会であったり、あるいはその新しい展示に向けての権利を持っているところとの話し合いであったりというような次のステップにつながるきっかけになればと思っております。

北の映像ミュージアム　調査報告

■実施概要

対象施設：北の映像ミュージアム（北海道）
日　　程：令和４年９月29日（木）、30日（金）２日間
同 席 者：北の映像ミュージアム　理事長 佐々木純氏、副理事長 森哲子氏、事務局長 和田由美氏、
文化庁
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ主任研究員・岡田秀則氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■北の映像ミュージアム　基本情報

▶館概要

設置主体：特定非営利活動法人北の映像ミュージアム
所 在 地：〒060-8637 札幌市中央区南２条西５丁目6-7 メゾン本府７階　亜璃西社内
TEL：011-522-7670
HP：http://www.kitanoeizou.net/

▶映画資料管理設備　※現在展示施設はなし

・北の映像ミュージアム事務所（株式会社亜璃西社内）
・平岸倉庫（札幌市博物館活動センター内）
・北海学園大学　大石教授研究室
・佐々木理事長宅

▶データベース

・Excelによるリスト管理　※各コレクション別に整理されてリスト化されているが、資料ＩＤは未登録。

■沿革・歴史

1999年にジャーナリストで映画評論家の故・竹岡和田男氏を中心に北海道映像資料を保存・展示する「映像ミュージアム」設立を呼びかけ、2003年「NPO法人北の映像ミュージアム推進協議会」が誕生。2011年に旧さっぽろ芸術文化の館１階に「北の映像ミュージアム」を開館し2017年には来場者のべ６万人を達成するも、旧さっぽろ芸術文化の館の解体が決まりオフィスビルの一角へ移転。2021年にオフィスビルからも撤退し、2023年現在次の開設地を検討中である。

■映画資料保管状況

＜所蔵品＞

区分	点数	備考
映画ポスター	1,500点	北海道ロケ作品、1960年代～
映画脚本	1,300点	社会ドラマ、水木洋子
映画プレス資料	3,000点	1960年代～恋愛ドラマ、アクション、サスペンスほか
映画パンフレット	5,000点	時代劇、社会ドラマ、1950年代～現在
映画関連書籍	2,000点	全ジャンル
映画関連雑誌	1,500点	「キネマ旬報」（戦後復刊第1号～現在）、「映画の友」
映画スチル写真	1,000点	全ジャンル、北海道ロケ作品中心
映画関連機材	4点	8mmフィルム映写機 2台、16mmフィルム映写機 1台、35mmフィルム映写機 1台（使用不可）

●その他

・札幌市サンピアザ劇場のキセノンランプ式35mmフィルム映写機（富士セントラルF-7）
・黒澤明監督直筆の手紙（札幌ロケ『白痴』に関して）
・北海道ロケ地マップ100選＆リスト
・北海道出身の俳優及び映画人リスト

■映画資料保管状況

今回の調査では2019年の展示施設の閉館によって、北の映像ミュージアムの資料群がどのように保管されているのかの確認作業を行った。はじめに強調して置かなければならないことは、展示品及び収蔵品が詳細に整理され、リスト化されており、2日間という限られた期間に、効率的かつ集中的に資料が閲覧できたことである。このことはとりもなおさず、いつでも展示が再開できるようにと考えている当事者の意志と熱意の現われでもある。現在、発行されている冊子『北海道･映画ロケ地めぐりガイド シネマてくてく』（2021年）を見てもわかるとおり、北の映像ミュージアムでは、北海道は「ロケ地の宝庫」であるとの信念からロケ地調査に力を注いできた。この冊子に記録された作品は1925年から2021年までの508作品を数える。このような成果の基礎となるものが、作品ごとの資料整理である。ある作品に対して、どんな種類の資料があるのか、例えば、台本、原作本、ポスター、スチル写真、プレス、チラシ、パンフレット、新聞記事（特に北海道新聞）、グッズ、レコード、DVDなどを、おのおのリスト化し、現時点では50音順に保存用段ボール箱に保管されていた。今回はそうした個々の資料を逐一確認することはできなかったが、ロケ地王国・北海道の象徴的存在であり、ミュージアムの宝物として大切に保管されている黒澤明監督直筆の手紙5枚を見ることができた。1978年に新聞記者の求めに応じて書かれた「『白痴』と札幌について」と題された手紙には「ドストエフスキイの『白痴』を、日本の話に移しかえて、映画化するのに札幌以外の場所は考えられなかった」と明記されていた。ちなみにこの手紙の全文画像は現在の北の映像ミュージアムのホームページでも掲載されている。

次にミュージアムの中核をなす竹岡コレクションについて見てみよう。竹岡コレクションとは、ミュージアム設立の呼びかけ人のひとりである札幌在住のジャーナリストで映画評論家の竹岡和田男（1928～2000）の資料である。竹岡は『映画舞台 感情的批評と創造』（1971年）、『映画はいつでも映画だった 1945―1958のメモリー』（1984年）、『映画の中の北海道』（1991年）などの著作で知られるが、映画監督の大島渚が『映画はいつでも映画だった』に寄せた序文「時代の正確な証言」にある「年間二百本をこえる映画を見る竹岡さんの長い着実な歩みによって啓発」された若い人たちとの交流を称える言葉からも、竹岡の観客としての自由な立場から映画ライブラリーや映像ミュージアムを希求していたことがよくわかる（この大島の序文原稿も大切に保管されていた）。竹岡コレクションも、書籍、洋書、北海道関係資料、ムック本（叢書類）、映画祭、雑誌、パンフレットなどと分類・リスト化されていた。この中で特に目を惹いた資料は、戦後のファン雑誌の充実である。『日活映画』が第46号（1960年）から136号（1964年）までと比較的揃っているほか、終戦直後の『松竹』（1946年の創刊号を含む）『松竹グラフ』『オール松竹』や、『東宝』（1946年の戦後再刊を含む）『東宝改題 エスエス』『東宝映画』、『大映ファン』（1947年の創刊号を含む）や『東映の友』（1960年の創刊号を含む）など各社の広報宣伝誌・会報誌が、状態良く保存されていた。時代の証言者・竹岡が札幌において同時代に収集したことを思うと壮観でさえある。そして今回の発見は2種類の雑誌『新東宝』の創刊号であった。ひとつは1948年に東宝争議によって独立した会社・新東宝の雑誌であるが、もうひとつは1946年10月に創刊されたもので、東宝北海道支社宣伝課内に誕生したファン組織「東宝SS会」の機関誌である。その編集人・岡俊雄（1916～1993）は映画評論家・雑誌編集者として著名であるが、実は札幌の出身であり、竹岡の著書『映画はいつでも映画だった』にも序文を寄せている。それによると、大正の終わりから昭和13年（1938年）に東京へ出るまでの15年間、札幌で映画に熱中したのであり、「東京なみの映画文化の土壌があった札幌に育ったことをぼくは誇りにしていた」と書いている。こうした資料に触れると北海道は単にロケ地の宝庫であるばかりでなく、映画文化の豊穣な王国であったことが実感できた。

また、竹岡は「さっぽろ映画塾」などで若者たちと名作映画を見て語り合うことを身上としていた関係で、映像の収集も行っていたが、8mmやVHSで販売された（海外発売品も含む）和洋の古典映画に混じって、

16mm の『日活ニュース』（予告篇や特報）も数本確認できた。

竹岡とともに設立呼びかけ人のひとりである和田由美氏の事務所には、札幌のミニコミ同人誌『月刊キネ山旬三郎通信』（1987 年 12 月創刊号～ 1990 年 1 月の第 13 号）、隔月刊の『シネ・ブラボー北海道』（竹岡や和田等が編集を担当、1978 年～ 1991 年）のほか、謄写版の月刊映画情報誌『MOVIE FAN』（高並真也・高村賢治・西脇靖子編、1977 年 3 月創刊、2021 年 6 月終刊、全 530 号）などが保存されていた。『MOVIE FAN』は札幌市内の映画館ごとに封切・上映映画を紹介した手作りの雑誌で、上映館のチラシも綴じ込まれており、地元映画館の変遷を検証する上でも稀有な資料といえる。さらに、日活宣伝部 OB から寄贈された日活映画の新聞広告ファイル（1959 年、北海タイムス掲載分の切抜や版下の切抜）などもあり、展示施設閉鎖後もさまざまな資料が集まっていることが窺われた。

同様の新収蔵資料としては、道北・サロベツ原野（「シネマてくてく」記載）や道東・中標津（クレジットの協力記載）にロケを敢行した日活作品『戦争と人間』第一部、第二部（山本薩夫監督、1970 ～ 71 年）の写真スクラップがある。これは製作関係者か宣伝担当者からの寄贈と思われ、ロケ地での撮影の様子が時系列かつ総体的にわかる重要な資料であった。

映画評論家･品田雄吉の兄で、彼に映画を見ることの愉しさを教えたとされる品田平吉コレクションには、戦時下の雑誌統合によって再編された『映画評論』『新映画』『映画旬報』などが状態の良いかたちで含まれていた。

旧展示会場で「シンボルの映写機」として展示されていた 2 台の 35mm 映写機のうち、士別市の「銀映劇場」にあった 1963 年製「富士セントラル F-6 式」は士別市郷土資料館に移管されたが、もう一台の 1976 年製「富士セントラル F-120 式」は分解して保管されていた。映写機の関連資料としては昭和 30 年代の「映写技術者免許証」も数種、確認できた。

以上、2 日間という短い期間では、到底、北の映像ミュージアムの収蔵品を網羅することは不可能であったが、閲覧できた資料からだけでも、北海道という地域の特質を際立たせる貴重な資料群が手厚く保管・維持されていることが実見でき、そのことだけでも有用な機会だったといえるだろう。

大島渚の直筆原稿（竹岡和田男著『映画はいつでも映画だった』に寄せた序文）

「新東宝」
（「東宝SS会」の機関誌）

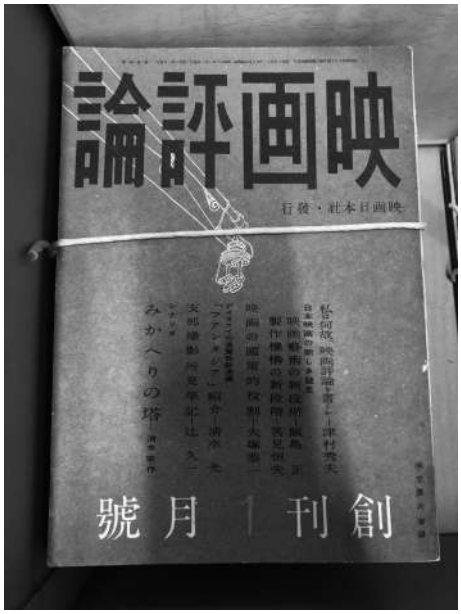
「新東宝」
（新東宝の雑誌）

ミニコミ同人誌
『月刊キネ山旬三郎通信』

ミニコミ同人誌
『シネ･ブラボー北海道』

ミニコミ同人誌
『MOVIE FAN』

『戦争と人間』
第一部、第二部の写真スクラップブック



「映画評論」
創刊1月號

1976年製「富士セントラル F-120式」

昭和30年代の「映写技術免許証」

札幌映像機材博物館　調査報告

■実施概要

対象施設：札幌映像機材博物館
日　　程：令和 4 年 10 月 1 日（土）
同 席 者：札幌映像機材博物館　　館長　山本 敏 氏
文化庁
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ健主任研究員・岡田秀則氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■札幌映像機材博物館　基本情報

▶施設概要

設置主体：札幌映像機材博物館　館長　山本　敏 氏
所 在 地：〒 003-0028　札幌市白石区平和通 2 丁目南 1-6（旧 : カメラ懐館）
TEL：090-8631-7050
設 立 年：2015 年（登別市内で会館。2022 年 6 月に札幌市内の現住所に移転）
開館時間：午前 10 時 30 分から午後 5 時まで
休 館 日：火曜日・水曜日
入 館 料：無料
HP：https://binmuseum.web.fc2.com/

▶映画資料公開・管理設備

・展示室

▶データベース

リスト管理なし

▶沿革・歴史

ビデオのポストプロダクションにて主に道内のローカル CM、特別番組などのカメラマンとして活動していた山本敏氏が、閉店していたパチンコ店を改装し 2015 年 9 月に「登別映像機材博物館」を開館。その後 2022 年 6 月に札幌市に移転し、「札幌映像機材博物館」に改称した。館長の山本氏管理のもと、VTR やビデオカメラをはじめフィルム機材を含めた放送機材を動態保存展示し、市民が気軽に見て触れ、学べる空間を目指している。入場無料の「映像機材の総合博物館」。

■所蔵映画資料概要

＜所蔵品＞

区分	点数
映画ポスター	20枚（B全）
映画関連書籍	約1,000冊
映画関連機材	多数

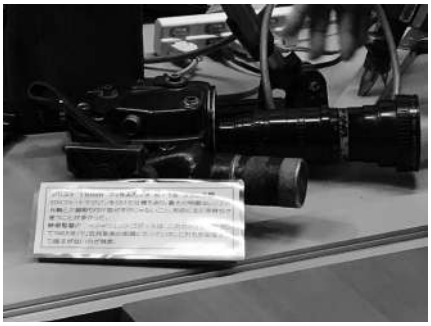
●その他

・8mm、16mm、35mm フィルムカメラ及び各映写機／SD タイプビデオカメラ 25 台　など

■映画資料保管状況

この私設博物館に入って、まず驚くことは、通常の博物館・資料館では当たり前であるガラスなどの仕切りがなく、すべての展示機材を手に取ることができ、その多くは操作することが可能であるという点である。これは映像カメラマンでもあった館長の山本敏（びん）氏自らが機材を修理できるという経歴に関係しているが、何より＜動態保存展示＞という山本氏の信念の現われなのである。かつては製作現場で稼働していた映像機材も、技術の変遷と共に＜歴史遺産＞として博物館に収集・保存・展示される訳であるが、この博物館ではもう一歩踏み込んだかたちで、当時のまま動くように調整されており、それを入館者自身も触って動かしてみることで、学びのある体験空間へと誘（いざな）われることになる。これは高度で複雑な電子基板から成る今日のデジタル機材と異なり、フィルムやテープといったメカニックなアナログ機材ゆえに可能なことかも知れないが、急速に失われてゆくアナログ映像機材を現時点で操作できる体験は、機械芸術でもあった映画・映像史への重層的な理解へとつながっているといえる。さらに展示機材を解説したキャプションにも、山本氏が操作した際に感じた特徴がわかりやすく書き込まれており、実物を手にした時の実感をより深く味わえるような工夫がなされていた。また運の良い入館者は、山本氏によるライブの解説や操作方法も享受できるかも知れない。

短時間の訪問で目にできた主な展示品は、フィルム機材では、ドイツ製の35mmカメラ「アリフレックス」、ジャン＝リュック・ゴダールがパリ五月革命を撮影したことで知られるフランス製の16mm手持ちカメラ「ボリュ」、手回しの35mm映写機、「KOEISHA」とプレートにある町工場で製造された組み立て式移動映写機（壁にはスクリーンが張られ映写可能）、16mmと35mmのドイツ製ステンベック編集台、カメラマンと助手の2人が乗れる西ドイツ製のペガサスクレーンなど。大きなライトボックスには8mmから70mmまでの各種フィルムの展示もあった。VTR機材では、2インチほか各種のテープ、北海道放送で街頭録音などに使用されたスイス製のナグラ録音機（鮮明な音声を再生することが可能）などがあり、テープ媒体の作品に対する保存の危機が叫ばれている今日、これらアナログビデオ機材の収集も貴重である。また初期の映写機・撮影機に関しては美術プロデューサーであった宮国登旧蔵のコレクションも含まれていた。そして、35mmの玩具映写機の隣には、さりげなく『明治元年』と題された戦前の玩具フィルムがあり、この作品は1932年、伊藤大輔監督の戊辰戦争を題材にした長篇時代劇（主演は大河内傳次郎、片岡千恵蔵）で、現在のところ玩具フィルムでしか現存が確認されていない作品である。



フランス製の16mm手持ちカメラ「ボリュ」

組み立て式移動映写機

西ドイツ製のペガサスクレーン

スイス製のナグラ録音機

TOHO スタジオ株式会社　調査報告

■実施概要

対象施設：TOHO スタジオ株式会社
日　　程：令和 4 年 8 月 5 日（金）、10 月 7 日 (金)　2 日間
同 席 者：TOHO スタジオ・島田充氏、富田修氏、近藤睦朗氏
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■ TOHO スタジオ株式会社　基本情報

▶施設概要

所 在 地：〒 157-8561 東京都世田谷区成城一丁目 4 番 1 号
TEL：03-3749-4121
設 立 年：1971 年

▶沿革・歴史

TOHO スタジオ株式会社は、日本国内における最大規模の撮影スタジオである「東宝スタジオ」の管理運営と制作プロダクションを担う会社である。東宝スタジオの変遷は、会社合併等により複雑であるが、最初の前身は 1932 年に写真化学研究所（P.C.L）が竣工した P.C.L. 映画製作所である。以降は、1937 年に「東宝映画東京撮影所」と改称し、更に 1941 年に「砧撮影所」、1951 年に「東宝撮影所」となり、そして 1971 年に現在の「東宝スタジオ」という名称となった。

■映画資料保管状況

関係各位の特別な配慮と、映画史に資する重要な資料との認識のもと、厳重に管理されている会社資料を今回、例外的に調査することができた。まず確認できた資料として、1962 年から 2012 年までの「製作日誌」50 冊がある（1965 年のみ未確認）。これは令和 3 年度の調査で明らかとなった、東京現像所に保管されていた東宝助監督会所蔵の「製作部作業日誌」1937 年～ 1951 年、全 14 冊を引き継ぐ資料で、製作部製作課の製作担当者が、日々の撮影予定を各作品の組ごとに 1 ページに記載し、変更や中止となった場合にはその旨が記されているもの。この日誌は作品の製作過程が精確にわかる実証的な記録であるばかりでなく、撮影所全体として同時期に稼働していた製作体制を経年的に分析する上でも極めて重要な資料といえる。例えば、1964 年 11 月のある一日には、『赤ひげ』（黒澤明監督）、『肉体の学校』（木下亮監督）、『侍』（岡本喜八監督）、『国際秘密警察 火薬の樽』（坪島孝監督）、『社長忍法帖』（松林宗恵監督）、『三大怪獣 地球最大の決戦』（本多猪四郎監督、円谷英二特技監督）、『花のお江戸の無責任』（山本嘉次郎監督）、『暗黒街全滅作戦』（福田純監督）、『団地七つの大罪』（宝塚映画、千葉泰樹・筧正典監督）の 9 作品が撮影に入っており、特撮映画は実写班と特技班がそれぞれ記載されていた。2013 年以降は、作品単位の日々のスケジュールが一冊に綴じられた「日々スケ／作品別日々スケジュール」という形式になっていた。

次に「スタッフ編成表／スタッフ表」10 冊がある。これは 1950 年代から 90 年代にかけて作成されたノー

ト形式の表で、東宝社史の別冊作品リストにある製作、原作、脚本、監督、撮影、録音、照明、美術、音楽というメイン･スタッフに加え、助監督、編集（時期によってはネガ編集も含む）、記録（スクリプター）、結髪、衣裳、メーキャップ、スチール、製作担当、製作係、経理担当、製作助手などが記入されていた。これらの情報は作品のクレジット画面にも載っていないものが含まれており、作品の基本情報を知る上で貴重な資料である（なお､情報の一部は東宝ホームページ内の「映画資料データベース（過去の作品情報）」に反映されている）。

「各社禁止（保留）作品一覧表」は戦後の占領期にGHQによって禁止されていた作品のネガ及びプリントが文部省と人事院に保管されていたことがわかる資料。「東宝作品作業目録」は東宝撮影所の会計課が作成した謄写版の目録で、1933年から1948年までに封切された作品の撮影期間や、セットやロケなどの撮影日数の内訳も記録されていた。また1950年代から現在までの完成台本（映倫提出用台本）が封切順に整然と保管されており、中には海外版のために作成された台本も含まれていた。

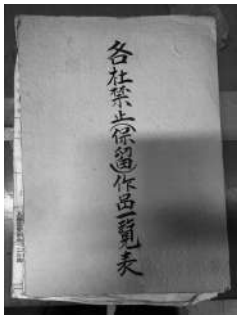
記念品･トロフィーとしては、『独立機関銃隊未だ射撃中』（谷口千吉監督、1963年）がアイルランドのコーク国際映画祭で受賞したトロフィーや、『けものみち』（須川栄三監督、1965年）がブラジル・サンパウロのサシ賞で最優秀外国映画賞を受賞したトロフィーなどが確認できた。後者は1968年に東宝南米10周年記念式典に出席した当時の松岡辰郎社長自らが受け取ったもの。

立体物としては、第一ステージと第二ステージの間にあった建物の入口上部に飾られていた東宝マークがあった。第一ステージと第二ステージはP.C.L.創業時に建てられたスタジオで、2010年に取り壊されたとはいえ、ここに飾られていた会社マークは、いわば東宝の象徴ともいえるもので、日本映画史の遺産として大切に保管されていた。

製作日誌（製作部製作課）
1962-1971

日々スケ／作品別日々スケジュール

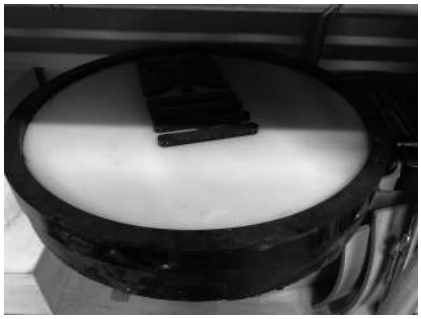
スタッフ編成表／スタッフ表



各社禁止（保留）
作品一覧表

トロフィー
1964年コーク映画祭
『独立機関銃隊未だ射撃中』

トロフィー
1966年サシ賞
『けものみち』



東宝ロゴマーク

株式会社東宝映像美術　調査報告

■実施概要

対象施設：株式会社東宝映像美術（世田谷区）
日　　程：令和 4 年 10 月 21 日（金）、11 月 7 日（月） 2 日間
同 席 者：株式会社東宝映像美術　戸嶋雅之氏、持田圭一氏、臺勝隆氏
文化庁、日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■株式会社東宝映像美術　基本情報

▶施設概要

設置主体：株式会社東宝映像美術
所 在 地：〒 157-0066 東京都世田谷区成城 1-4-1
TEL：03-3749-2110（総務・経理部）
設 立 年：1970 年

▶沿革・歴史

1970 年に東宝撮影所の美術部が「東宝美術」、翌年に同所の映像事業部が「東宝映像」としてそれぞれ独立。1988 年に東宝美術と東宝映像が経営統合し、「東宝映像美術」が誕生した。ゴジラ作品をはじめ様々な作品の映画美術や特撮を手掛けると同時に、博覧会映像や大型テーマパークにおけるショーセットなどの製作・保守を行っている。

■映画資料保管状況

今回、閲覧できた美術資料のファイルは、全て現在も美術制作の参考資料として使用されているものであり、持出・管理には細心の注意が払われていた。資料の概要は、東宝撮影所の製作部美術課時代から、近年までに作成された、美術図面やロケハン写真、特撮関係の資料が、主に作品ごとにスクラップブックにまとめられている一方、作品単位を離れて、時代劇、現代劇で参照されるそれぞれの建築物や小道具、衣裳ごとに仕分けられているファイルもあり、その蓄積はかなりの分量になっていた。背表紙に「天国と地獄 県警関係」と書かれたスクラップブックは、黒澤明監督の『天国と地獄』（1963 年）のために神奈川県警察に取材して撮った鑑識員の服装や持ち物、鑑識用具のほか、パトカー、覆面パトカー、鑑識車などの写真が解説入りで貼られており、その後の刑事物にも参照されたであろうことが想像できるが、同時に現在では、1960 年代の時代考証資料にもなっている。ロケハン写真に関しても「都内（銀座）昭和 30 年代」、「新宿街並 昭和 30 年代」、「渋谷ラーメン・餃子屋横丁 昭和 36 年 10 月」、「大阪（新世界・天下茶屋・和風屋敷・その他）昭和 30 年代」などに新たにまとめ直されたファイルが存在することもその証左であろう。ただこれら第一級の歴史的な風俗写真が、一般の写真家や新聞記者が撮ったものと異なるところは、映画のセットに再現できるための視点で撮影されていることであり、風景写真もオープンセットが組めるように複数の写真がパノラマ状に貼り合わせてある。昭和 30 年代の風景を映画的に再現することに腐心した 2009 年の『ゼロの焦点』（犬童一心監督、瀬下幸治美術

監督）はそのような蓄積の成果でもあった。

作品に紐付けられた主な資料に次のようなものがあった。表紙に「美術課備付（そなえつけ）村木與四郎調製 27.2.25」と美しいレタリング文字で書かれたスクラップブックは、当時、美術助手であった村木与四郎が作成したもので、作品は谷口千吉監督の『霧笛』と黒澤明監督の『生きる』に関する写真資料（2作品の美術監督は松山崇）。この中の写真から『生きる』において市民が埋め立てを陳情するドブ池の背景に見える橋を含めた周辺は、東宝スタジオの所内に建てられたオープンセットであることがわかった。

『柳生武芸帳』（稲垣浩監督、1957年）美術資料からは、格式ある柳生邸の武家書院造りを再現するため多くのセット図面が書かれていると同時に、忍者屋敷としての仕掛けにも大胆な工夫が凝らされている様子がわかった。また、よみうりランド近郊にあった「生田オープン」が使用されたことも確認できた。美術監督は北猛夫と植田寛。

『赤ひげ』（黒澤明監督、1965年）美術資料からは、世田谷区・大蔵にあったオープンセット用の敷地、いわゆる「農場オープン」に小石川療養所を含む宏大なオープンセットが建てられた様子が具体的にわかり、複数のスクラップブックには手術道具などの医療品の参考写真も貼り付けてあった。美術監督は村木与四郎。

『侍』（岡本喜八監督、1965年）美術資料からは、調布市・下石原の多摩河原にあった1万平方メートル以上あるオープンセットの敷地に、メインとなる桜田門や周囲の辻番所、さらに井伊大老邸や松平肥前守邸といった武家屋敷の表を、史実に照らし合わせて忠実に再現したことがみてとれた。美術監督は阿久根巌。

今回、再確認された複数のオープンセット敷地からも、東京で作られた東宝時代劇の規模の大きさと底力をみてとることができた。

そのほか、記念アルバムとして作成され関係者に贈呈された『ハワイ・マレー沖海戦』（山本嘉次郎監督、円谷英二特技監督、1942年）の写真帳も確認できたが、同様のものに『上海陸戦隊』（熊谷久虎監督、1939年）の写真アルバムがあり、これは今まで他機関に所蔵がない資料と思われる。また所内にあった東宝フォトの写場が閉鎖された際に移管された宣伝用写真のスチルブックも多数保管されていた。

「天国と地獄 県警関係」
スクラップブック

『ゼロの焦点』ロケハン写真等

「美術課備付村木與四郎調製 27.2.25」
（『霧笛』と『生きる』に関する写真資料）

『赤ひげ』美術資料

『侍』美術資料

『上海陸戦隊』
写真アルバム

世田谷文学館　調査報告

■実施概要

対象施設：世田谷文学館
日　　程：令和 4 年 11 月 11 日（金）、12 月 2 日（金）　2 日間
同 席 者：世田谷文学館・庭山貴裕氏、竹田由美氏
文化庁、日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■世田谷文学館　基本情報

▶概要

設置主体：世田谷区（運営：公益財団法人せたがや文化財団）
所 在 地：〒 157-0062　東京都世田谷区南烏山 1-10-10
TEL：03-5374-9111
HP：https://www.setabun.or.jp/
休 館 日：月曜日（祝休日の場合は翌平日）、年末年始および館内整備期間
開館時間：10：00 ～ 18：00（入館は 17：30 まで）
観 覧 料：有料
展 示 室：展示室（コレクション展示、企画展示）
設 立 年：1995 年（開館）

▶映画資料公開・管理設備

・展示室
・収蔵庫

▶データベース

・I.B.MUSEUM（早稲田システム開発株式会社）

▶沿革・歴史

世田谷文学館は 1995 年に東京 23 区では初の地域総合文学館として開館した。「ジャンルの枠にとらわれない」「幅広い層に親しまれる」「生き生きと活動する」文学館を開館以来の基本方針として、文学を軸に、マンガ、映画、美術、デザイン、音楽など近接する諸分野も視野に入れた企画展、コレクション展、教育普及事業などを展開している。

主に明治以降の世田谷区にゆかりのある文学資料を収集保存し、横溝正史をはじめ推理小説作家資料、森茉莉・小堀杏奴など森鷗外の家族資料、斎藤茂吉・北杜夫資料などに特色があるが、開館時の常設展示室映画コーナー設置（1995 年）、「映画と世田谷」展（1996 年）、「世田谷フィルムフェスティバル」（2000-2009 年）などの事業と並行し、区内の東宝スタジオに関係した映画人の資料収集にも力を入れてきた。その後も「和田誠展 書物と映画」（2011 年）、「開館 20 周年記念 植草甚一スクラップ・ブック」展（2015 年）、「生誕 100 年

映画監督･小林正樹」展（2016 年）などの企画展や、コレクション展、文学館 HP 内の「コレクション検索」などを通じて映画資料の公開活動を行なっている。

■映画資料所蔵状況

種別毎の数量：

・台本 約 2,000 点
・映画美術・衣裳デザイン資料 約 7,000 点
・ポスター 約 1,700 点
・パンフレット 約 350 点
・プレス資料 約 30 点
・スチル・スナップ写真 約 7,000 点
・スクラップ・ブック 約 300 点
・関連図書 約 1,000 点
・関連雑誌 約 7,000 点

なお、上記には世田谷に在住または東宝に所属した映画人・関係者の旧蔵資料が含まれており、主な映画人として、映画監督では小林正樹、成瀬巳喜男、山本嘉次郎、堀川弘通、福田純、須川栄三ほか。美術監督では中古智、植田寛、鈴木儀雄ほか。そのほかに柳生悦子（衣裳デザイナー）、伊藤武郎（プロデューサー）、藤本文枝（スクリプター）、高山良策（画家、怪獣造形製作者）、舘林三喜男（政治家・内務官僚）などの各資料がある。また、植草甚一（文芸・ジャズ・映画批評家）など、多岐にわたる旧蔵資料の中に一部映画資料を含むものもある。

■映画資料保管状況

世田谷文学館が行った映画関係の展示と図録の充実については、今更取り上げる必要のないほど、周知の事実である。今回の調査では整理の終わった映画コレクションの中から、比較的目に触れる機会が少ないと思われる 5 つの個人コレクション、監督の山本嘉次郎と堀川弘通、プロデューサーの伊藤武郎、スクリプターの藤本文枝、映画法立法の立役者である内務官僚・舘林三喜男の旧蔵資料を選び、その一部に関して特別閲覧の便宜をはかってもらった。

山本嘉次郎（1902 ～ 1974）旧蔵資料は、原稿･自筆資料、スチル･スナップ写真、図書、調度品など総数 346 点。写真に関しては P.C.L. から東宝時代の戦前の代表作のスチル写真以外は、山本の幼少期を含む家族写真、戦後の交友関係を示す写真などが含まれていた。原稿・自筆資料は、随筆家としても知られた山本の戦後の草稿や晩年のノート・メモ帳であり、特に 1973 年の叙勲の際の祝賀に対する返礼のメモや、直筆年譜、さらにグルメ著作も多い山本の 62 歳の誕生祝の献立表などが目を惹いた。ノートに貼り付けられた児童投稿文の新聞切抜からは、『馬』（1941 年）『風の子』（1949 年）など子どもを主人公にした映画に独自性を発揮した山本ならではの童心に対する関心が、晩年まで衰えなかったことがみて取れた。また自身のスケッチ帖なども残されており、マルチタレントの先駆けであった山本の多彩な仕事の一端が窺われた。山本については、1920 年代の日活でのシナリオ作家時代から、1930 年代の P.C.L. 草創期を経て戦後にいたる東宝を代表する監督でありながら、黒澤明や谷口千吉といった監督の師匠であったことのみが言及されるにとどまり、山本自身についての研究はまだ緒についていないのが現状であり、これらの資料が有用なテキストになることは間違いないといえる。

堀川弘通（1916 ～ 2012）旧蔵資料は、台本やスチル・スナップ写真など製作資料 268 点。自身の監督作に関してはデビュー作の『あすなろ物語』（1955 年）から劇場最終作『エイジアン･ブルー　浮島丸サコン』（1995

年）までほぼ全ての作品の台本（初稿、改訂稿、完成稿などが揃い、書き込み・カット割・絵コンテ多数）やスチル写真（スクラップブック一式）がまとまって残されており、テレビ作品や未映画化（黒澤明が堀川のために用意した「日々平安」の台本）または企画作品の資料も含まれていた。『評伝 黒澤明』（2001 年）を著した堀川の黒澤映画に関する助監督時代の資料は、従来知られたもの以上の充実を示していた。初期の『一番美しく』（1944 年）のもとになった台本「日本の青春／渡邉ツル達」に始まり、特に完成に困難を極めた『七人の侍』（1954 年）に関しては、よく知られる黒澤の人物スケッチ「勘兵衛／儀作／与平」や、場面割も付随した複数の台本の揃いのほか、製作延期で何度も更新されたことがかわるスケジュール表、カメラ位置も書き込まれた「農場オープン」見取図、そして 30 枚以上の連続したスナップ写真からは、ラストの野武士襲撃の撮影が監督の立ち位置も含めて手に取るようにわかるものとなっていた。今回は閲覧できなかったが、堀川の助監督時代の資料には成瀬巳喜男監督作品も残されている。さらに堀川の手元にあった経緯は特定できないが、山本嘉次郎監督の『エノケンのちゃっきり金太』前后篇（1937 年）の製作に使用した書き込みのある台本（製作主任旧蔵と推定）があり、総集版しか現存しない当該作品の分析には欠かせない資料といえる。

伊藤武郎（1910 ～ 2001）旧蔵資料は、日記・ノート・手帳、台本、スチル写真など総数 313 点。1960 年代後半から晩年にいたる伊藤が製作に関与した台本は 100 点以上に上り、資料の中心を占めるが、今回は時間の関係で、日記・ノート・手帳類を閲覧した。内訳は 1967 年から 1992 年までの間に書かれた「伊藤武郎日記」4 冊、1932 年と 1957 年、1965 年から 2001 年まで（途中欠年あり）の「伊藤武郎手帳」37 冊である。既製のノートに書かれた「日記」は、大映の企画プロデューサー会議に出席した際の手控えで、商業映画のプロデューサーとしての伊藤の辣腕ぶりが垣間みえる重要なものであるが、継続しているという意味では製作者協会の小型手帳に日々の様子が綿密に綴られた「手帳」37 冊の存在には圧倒された。1932 年の手帳は、早稲田大学在学中のもので観た映画や金銭支出録に混じって「雑誌『プロキノ』を買う」などの記述が見えた。1957 年のものは『異母兄弟』製作のこと（撮影所は調布の中央映画）が中心。1965 年以降は『スパイ』（1965 年）『ドレイ工場』（1968 年）『戦争と人間』三部作（1970 ～ 73 年）『小林多喜二』（1974 年）『金環蝕』（1975 年）など、自身企画の独立プロ作品に関する製作過程がつぶさに書き込まれており、伊藤の精力的な行動力と企画を実現させる粘り強さを裏付けるものとなっているが、山本薩夫や亀井文夫、山形雄策、久保一雄ら盟友の死を悼む記述には伊藤の人間的な優しさがあふれ、胸を打つものがあった。晩年には自伝「日本映画の黄金期と、わが独立プロ運動」を書き進める様子が書かれていたが、原稿そのものは伊藤武郎旧蔵資料には含まれていなかった。そのほか、1960 年に渡航したモスクワ国際映画祭の見聞ノートもあり、「混血児 1 巻→ 8 巻」と題されたノートには詳細なカット表が記録されており（伊藤の預かり品か）、1953 年の関川秀雄監督の当該作は現存が確認されていないだけに貴重な資料といえる。

藤本文枝（1912 ～ 2003）旧蔵資料は、台本、スクラップ・ブック、スチル写真、図書・雑誌など総数 259 点。戦後の稲垣浩監督作品のスクリプターとして知られる藤本の資料には、主要な稲垣作品のほぼ全ての資料が残されていた。時間の関係で『忠臣蔵 花の巻 雪の巻』（1962 年）の資料を中心に閲覧することになったが、決定稿だけでも 2 種類あり、通常の台本（B5 判）より一回り大きな台本には余白がとってあり、そこに絵コンテが書き込めるような工夫がなされていた。そのほか、編集台本に付随してダビング表、スケジュール表など、準備から完成までの全製作工程を理解する上で必須な資料が綴じ込まれており、さらに海外版の台本（短縮版で英語ナレーション原稿付）まで揃っていた。おそらく全ての担当作品に関してこのような資料の充実があると思われる。また写真に関しても作品スチルやスナップ以外にも、稲垣監督の旅行に同行した際のアルバムなどもあった。藤本の映画界入りは 1930 年代の新興キネマであるが、新興キネマ京都撮影所の月曜会同人による謄写版の機関誌『時代考証』の存在を確認できたことは、新興キネマのスタッフによる時代考証の勉強会が持たれていたことを裏付けるものであり、今回の重要な発見であった。藤本資料収蔵の経緯は、先に稲垣監督

の助監督であった高瀬昌弘監督の資料が世田谷文学館に収蔵されたことにより、高瀬監督の助言・紹介があったとのこと。同様に稲垣組の美術監督・植田寛の資料も収蔵されており、稲垣作品を多角的に研究する上でも素晴らしいコレクション群といえる。

舘林三喜男（1904 ～ 1976）旧蔵資料は、映画法関連の自筆資料や雑誌・新聞の切抜資料、写真など総数 91 点。原稿類は映画法概論や解説、「映画行政ノ指導精神」と題されたものや、映画法運用懇談会の質疑応答の速記録（赤字入れあり）など。切抜は雑誌『日本映画』『警察精神』などに発表された舘林の署名記事。そのほか、日記類はなかったが、舘林自身の肖像写真や関係人物との集合写真があった。また経緯は不明であるが、瀬尾光世の日本マンガフィルム研究所の製作風景のスナップ写真 5 点が確認された。

以上、これらの圧倒的な資料群を目にして思うことは、じっくりと時間をかけて読み込み、細部にこだわる考証を深めたならば、確実に映画史の新たな景色が浮かび上がってくるという予感である。世田谷文学館の収集の原則が、世田谷在住または世田谷に関連した映画人ということは当然であるが、こうしたコレクションの重層的な拡がりを実感するとき、世田谷に東宝という映画製作・流通の拠点があり、その周辺に人々が集まっていたことの重要性が際立ってくる。逆に世田谷という磁場に限定することで、異なる立場の映画人の資料を集約することが可能となり、細心の注意を持って保存された資料からは（全ての資料は中性紙の保存容器に収納され目録化されている）、新たな歴史認識が切り拓かれることは間違いないだろう。

山本嘉次郎メモ帳（表紙）

『日々平安』
堀川弘通旧蔵台本

『渡邊ツル達』
堀川弘通旧蔵台本

伊藤武郎手帳

『忠臣蔵』（表紙）
藤本文枝旧蔵台本

舘林三喜男
「映画行政ノ指導精神」

データベース実態調査

■概要

対象施設のデータベースの実態調査を行い、映画資料のデータ管理方法及び「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」との連携難易度を確認する。

■調査対象

世田谷文学館の電子データベース

■調査内容

①資料種別　②資料内容詳細　③自動連携の可否

■調査結果

①資料種別

図書、雑誌、台本、ポスター、パンフレット、チラシ、プレスシート、劇場プログラム、スチル・スナップ写真、スクラップズック、美術デザイン画、衣装デザイン画、調度品等

②資料内容詳細

主に以下の項目を登録してデータベースを作成している。

項目	左記項目の説明
資料番号	個別の管理番号
分類詳細	資料の種類
資料名	資料の名称
資料名（カナ）	資料名のヨミガナ
副題	資料の副題、または資料名に補足する情報
資料作者名	脚本家名、当該作品の監督名、筆者名などの資料に関する作者名
出版社・製作者	出版社や発行者・団体など
年月日（発行）	資料の発行年月日、製作年月日
サイズ	資料の高さ・巾・奥行き
素材	例：紙／原稿用紙／ノート／ペン書き／鉛筆書き、また枚数など
内容	簡単な資料内容
状態	破損、劣化に関する記述など
付属品	本体以外の付属品（例：メモ、コピーなど）に関する記述
付記	資料に関する備考情報の記述
保管場所	保管場所（収蔵庫名）
棚位置	棚位置（記号、番号）
取得先情報	寄贈者、購入先の情報など

③自動連携の可否

現在館内職員専用のため自動連携は不可。

■データベース実態調査まとめ

世田谷文学館のデータベースは、個別資料ごとにID管理されていることと、データ出力が可能であるため、JFROLへの連携は技術的には可能である（別途、具体的な連携方法及び一般公開する内容の検討を要する）。

株式会社東京現像所　調査報告

■実施概要

対象施設：株式会社東京現像所（調布市）
日　　程：令和４年８月19日（金）、26日（金）２日間
同 席 者：株式会社東京現像所　清水俊文氏
文化庁、日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■株式会社東京現像所　基本情報

▶施設概要

設置主体：株式会社東京現像所
所 在 地：〒182-8555　東京都調布市富士見町2-13
TEL：042-485-9915
設 立 年：1955年

▶沿革・歴史

1955年に東宝・大映・大沢商会など、映画関係各社の出資により設立。1956年にアグファ・カラー、1957年にイーストマン・カラーの現像業務を開始。以後、時代の変化に合わせて、CMや70mm現像、ビデオ業務等も受注。2010年にデジタルシネマパッケージ（DCP）業務を開始。現在４K放送のマスタリング業務を実施するなどデジタル時代にシフトしつつ、同時にフィルム現像業務も継続している。ただし2023年11月末に全事業の終了が予定されている。

■映画資料保管状況

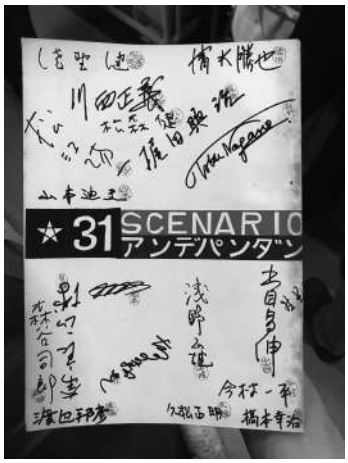
今年度も令和３年度に引き続き東京現像所に保管されている東宝助監督会資料を調査した。さらにこの資料の東京現像所における管理者であり、東宝助監督会のメンバーである清水俊文氏に聞き取り調査ができたことは、東宝スタジオにおける助監督室の様子や、そこに集積された資料の来歴などを具体的に知ることができ、大きな成果であった。東宝に限らず助監督は、監督になるための幹部候補生であり、製作の現場をサード、セカンド、チーフというように段階を踏んで異なる分野の仕事を学び、総体的な映画作りを習熟する訳であるが、その一方で、自らの創造力を啓発し独自の映画的世界を構想するためシナリオ執筆に励まなければならない。東宝助監督会に蓄積された資料群のうち、圧倒的な分量を占めるのが撮影台本であるのは当然であるが、今回は従来あまり注目されてこなかった助監督によるシナリオ同人誌の存在にしぼって調査を重ねた。

東宝助監督同人によるシナリオ誌「シナリオ･アンデパンダン」は､1954年６月の第１号こそ確認できなかったが､1955年11月発行の第５号から､途中わずかの欠号があるとはいえ､1998年５月の終刊となる第44号まで、ほぼ揃ったかたちで現存していた。助監督という激務の中、多い年では年４回の発行をみた背景には、例えば1960年代前半には50人近く助監督が在籍したという事情にもよるが、何よりも彼らの創作意欲を後押ししたのは、シナリオ修業こそ監督になるための必須な階梯だとする東宝スタジオの伝統がある。それは、大先達・

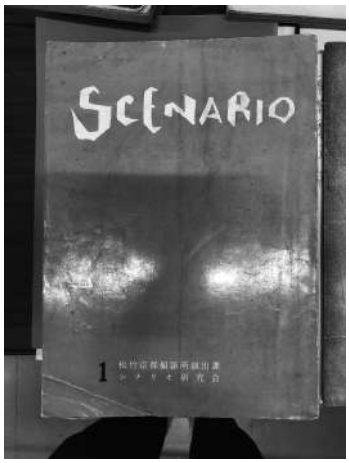
黒澤明が言ったとされる＜一日一枚書けば一年に三百六十五枚は書ける＞という、書けないことを忙しさのせいにしない姿勢に支えられていた。事実、第 40 号（1985 年 10 月発行）には黒澤が題字を寄せている。実際に掲載シナリオが映画化されたケースもあった。『太陽は呼んでいる』（第 8 号掲載、森谷司郎脚本、須川栄三監督、1963 年）、『娘と私』（第 14 号掲載、廣澤榮脚本、堀川弘通監督、1962 年）、『戦国野郎』（第 21 号掲載、佐野健脚本、岡本喜八監督、1963 年）、『自動車泥棒』（第 24 号掲載、和田嘉訓脚本・監督、1964 年）で、特に『自動車泥棒』は和田監督のデビュー作となった。また 1992 年 5 月に出された第 42 号の巻末には「東宝争議の時の所長室だったわが助監督室は、老朽化に伴い PCL 発祥の地、技術課 3 階に四月二十八日移転しました」とある。技術課 3 階とは第一ステージと第二ステージの連結部分の入口がある建物のことで、こうした助監督室の変遷は清水氏への聞き取り調査から得られた情報を裏付けるものであった。

さらに助監督によるシナリオ同人誌の発行が、各社にあったことを確認できたことは、東宝助監督会の交流関係を知る上でも、新鮮な驚きであった。大島渚ら松竹ヌーヴェル・ヴァーグを生んだ松竹大船撮影所助監督室の「シナリオ集」は有名であるが、同様のものが松竹京都撮影所からも出されており、ここに詳細は書ききれないが、日活（誌名は「麦 LE BLE」）、大映京都と東京（京都の誌名は「監督室」「葬」、東京の誌名は「助監督」）、東映京都と東京（誌名はともに「シナリオ／しなりお」）のほか、新東宝や宝塚映画からも発行されていたことが確認できた。これらは 1960 年代から 70 年代初頭に集中していたが、それに先行するかたちで、1950 年代から日本映画監督新人協会（日本映画監督協会の助監督からなる組織）がシナリオ誌『映画新人』を刊行しており、各社の助監督が横断的にシナリオを投稿し、コンクールも行われていたことがわかった。

そのほか、昨年同様に東宝助監督会に集積された製作部照明課の旧蔵資料としては、東宝照明新人会作成の「けものみち 照明データー」がある。これは『けものみち』（須川栄三監督、石井長四郎照明、1965 年）をテキストに、当時の照明助手が、テレビの台頭も踏まえ、映画独自の照明技法とは何かを、先輩の意見を参考にしながら考察・図解したもので、助監督と照明助手との連携を窺わせる資料であった。



「シナリオ・アンデパンダン」
（東宝助監督同人）



「シナリオ集」
（松竹京都撮影所）

「麦 LE BLE」
（日活撮影所助監督室）

「葬」
（大映京都9人会）

「しなりお」
（東映京都助監督部）

「リアリティ」
（新東宝助監督室）

「あしおと」
（宝塚映画助監督室）

「映画新人」
（日本映画監督新人協会）

「『けものみち』照明データー」
東宝照明新人会作成

参考）調査時に発見したシナリオ同人誌のリスト（一部）

書名	号数	左記号の年代	発行
シナリオ・アンデパンダン	4, 5, 6, 7, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 26, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44	1955年～1998年	東宝助監督同人
かえる	19	1958年	新東宝助監督部
リアリティ	1	1963年	新東宝助監督室
あしおと		1965年	宝塚映画助監督室
シナリオ集 SCENARIO	29, 31, 34, 35, 36, 37, 39, 41	1963年～1974年	松竹大船撮影所監督助手会
シナリオ集 SCENARIO	1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 11, 新人特集号	1958年～1963年	松竹京都撮影所演出助手室
シナリオ	No.3	1965年	東映東京助監督部
しなりお	2, 3, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 復刊1,	1961年～1963年、1966年	東映京都助監督部
麦 LE BLÉ	2, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14	1958年～1964年	日活撮影所助監督室
助監督	8, 11, 14, 16, 19	1960年～1970年	大映東京撮影所助監督室
監督室	1, 2	1962年	大映京都監督室
葬	創刊号, 3, 4, 5, 6（終刊号）	1965年～1972年	大映京都９人会
映画新人	9, 14, 15, 16, 17, 18, 19, シナリオ集No.1	1952年～1961年、1967年	日本映画監督新人協会

令和4年度文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」展示「映画はいかにして作られ、そして楽しまれてきたか ～最新調査で発見された映画資料展～」

実施概要

日　　時：2023 年 2 月 11 日（土・祝）～ 19 日（日）10:00 ～ 19:00
会　　場：調布市文化会館たづくり　北ギャラリー（〒 182-0026 東京都調布市小島町 2 丁目 33-1）
料　　金：入場無料
主　　催：文化庁
運　　営：特定非営利活動法人映像産業振興機構
提　　携：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団
協　　力：TOHO スタジオ株式会社、株式会社東宝映像美術、株式会社東京現像所、東宝助監督会、NPO 法人北の映像ミュージアム、株式会社東映京都スタジオ、公益財団法人松竹大谷図書館、ナカバヤシ株式会社、株式会社インフォマージュ

▶概要

令和 4 年度の実地調査結果を元に展示を実施。調布・世田谷地区の東京現像所、TOHO スタジオ、東宝映像美術の調査では助監督によるシナリオ同人誌やスタッフ表、美術図面等が発見された。また北海道地区の地域に関連した映画資料を収集･保存する北の映像ミュージアムの調査では映画会社各社の会報･ファン雑誌（支社独自発行含む）、地元ミニコミ誌等の映画資料が発見された。今回の展示は、前者の制作者側（映画撮影する側）の資料と後者の観客側及び映画ロケ地として映画撮影される側の資料を、ロケーション撮影に関する資料を媒介に連続させて、＜映画がいかにスタッフワークによって作られ、そして観客に楽しまれてきたか＞というテーマによる一連の流れで構成した。

▶展示内容

各種映画資料（展示品リスト参照）及び事業紹介※
※令和 4 年度事業紹介（パネル）／「令和 4 年度事業における映画脚本等のデジタルアーカイブ化について」（モニター）／過去 4 年間の事業紹介（パネル）

▶集計データ

総来場者数：1673 人（同会場で同時開催の別展示と共通受付での集計人数）

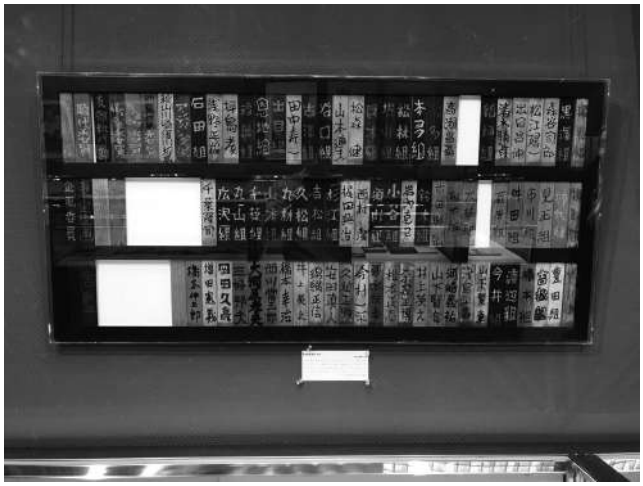
▶展示品リスト

	資料名	所蔵元
1	製作日誌 1964年	TOHOスタジオ
2	製作日誌 1985年	TOHOスタジオ
3	「スタッフ表 Ⅱ 自33.12 至39.1」	TOHOスタジオ
4	「スタッフ表 Ⅲ 自39.2」	TOHOスタジオ
5	「映画のファクター 東宝「製作担当者」の人々」『キネマ旬報』1961年9月下旬号	個人蔵
6	『けものみち』サシ賞トロフィー	TOHOスタジオ
7	『けものみち』(1965年)ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
8	「けものみち　照明データー」東宝照明新人会(1965年)	東宝助監督会
9	東宝スタジオ航空写真(1982年)	TOHOスタジオ
10	東宝助監督室 木札	東宝助監督会
11	カチンコ	東宝助監督会
12	特撮用カチンコ	東宝助監督会
13	東宝助監督会同人「シナリオ・アンデパンダン」(1955年～1998年)	東宝助監督会
14	「映画のファクター 東宝助監督会の人々」『キネマ旬報』1961年3月上旬号	個人蔵
15	日活撮影所助監督室「麦 LE BLÉ」(1958年～1964年)	東宝助監督会
16	大映京都監督室「シナリオ集 監督室」(1962年)	東宝助監督会
17	大映京都9人会「葬」(1965年～1972年)	東宝助監督会
18	大映東京撮影所助監督室「助監督」(1960年～1970年)	東宝助監督会
19	「映画のファクター 大映東京撮影所助監督部の人々」 『キネマ旬報』1961年7月下旬号	個人蔵
20	『戦国野郎』(1963年)ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
21	「躍進東寶映画」(1937年)	個人蔵
22	松竹大船撮影所監督助手会「シナリオ集 SCENARIO」(1963年～1974年)	東宝助監督会
23	松竹京都撮影所演出助手室「シナリオ集 SCENARIO」(1958年～1963年)	東宝助監督会
24	東映東京撮影所助監督部「シナリオ」(1965年)	東宝助監督会
25	東映京都撮影所助監督部「しなりお」(1961年～1963年、1966年)	東宝助監督会
26	宝塚映画助監督室「あしおと」(1965年)	東宝助監督会
27	新東宝助監督部「かえる」(1958年)	東宝助監督会
28	新東宝撮影所助監督室「リアリティ」(1963年)	東宝助監督会
29	日本映画監督新人協会「映画新人」(1952年～1961年、1967年)	東宝助監督会
30	会社案内(1974年)	東京現像所
31	10年のあゆみ(1966年1月発行)	東京現像所
32	社報No.1(1958年8月)	東京現像所
33	タイミング・比較一覧表	東京現像所
34	オプチカル合成・色チャート	東京現像所
35	『柳生武芸帳』(1957年)美術資料	東宝映像美術
36	『侍』(1965年)美術資料	東宝映像美術
37	『侍』(1965年)ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
38	『生きる』(1952年)美術資料	東宝映像美術 所蔵

	資料名	所蔵元
39	『生きる』（1952年）プレスポスター	個人蔵
40	『赤ひげ』（1965年）美術資料	東宝映像美術
41	『赤ひげ』（1965年）ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
42	東宝マーク	TOHOスタジオ
43	東宝マークの前で撮影した記念写真（1964年）	東宝助監督会
44	『雪の断章 -情熱-』（1985年）美術資料	東宝映像美術
45	『雪の断章 -情熱-』（1985年）ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
46	『ゼロの焦点』（2009年）美術資料	東宝映像美術
47	『ゼロの焦点』（2009年）ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
48	ファン雑誌『日活映画』 ［第36号（1959年2月号）、第48号（1960年3月号）、第52号（1960年7月号）、第86号（1963年5月号）、第90号（1963年9月号）、第116号（1966年7月号）］	北の映像ミュージアム
49	ファン雑誌『東映の友』 ［創刊号（1960年7月号）、第15号（1961年9月号）、第20号（1962年2月号）、第29号（1962年11月号）、第30号（1962年12月号）、第56号（1965年2月号）］	北の映像ミュージアム
50	ファン雑誌『大映ファン』[1949年12月号、1950年1月号別冊付録]	北の映像ミュージアム
51	ファン雑誌『松竹』[1949年4月号、1949年7月号]	北の映像ミュージアム
52	ファン雑誌『東宝』[再刊16号（1948年4月号）、再刊21号（1948年11月号）、再刊23号（1949年4月号）]	北の映像ミュージアム
53	『新東宝』1948年6月創刊号	北の映像ミュージアム
54	『新東宝』No.1（1946年10月発行）	北の映像ミュージアム
55	東映北海道支社教育映画課 広告「教育映画は東映」	北の映像ミュージアム
56	『ムービー・ファン／MOVIE FAN SAPPORO』第26号（1979年4月）	北の映像ミュージアム
57	『月刊キネ山旬三郎通信』創刊号（1987年12月）	北の映像ミュージアム
58	『シネ・ブラボー北海道』創刊号（1978年）／第22号（1983年2月）	北の映像ミュージアム
59	「さっぽろ映画塾」チラシ（1992年～1993年）	北の映像ミュージアム
60	竹岡和田男著『映画はいつでも映画だった』（1984年）	北の映像ミュージアム
61	大島渚直筆原稿	北の映像ミュージアム
62	『戦争と人間 第一部／第二部』（1971年～1972年）写真スクラップブック	北の映像ミュージアム
63	『戦争と人間 第一部』（1971年）ポスター	東映太秦映画村・映画図書室
64	リーフレット「北海道ロケ地マップ100選」（2011年）	北の映像ミュージアム
65	「北海道・映画ロケ地めぐりガイド シネマてくてく」（2021年）	北の映像ミュージアム
66	DVD「北の映像ミュージアム20年の歩み」（2019年、26分）	北の映像ミュージアム

・展示風景

・製作日誌、スタッフ表、東宝スタジオ航空写真等



・東宝助監督室木札

・シナリオ・アンデパンダン

・東京現像所関係資料

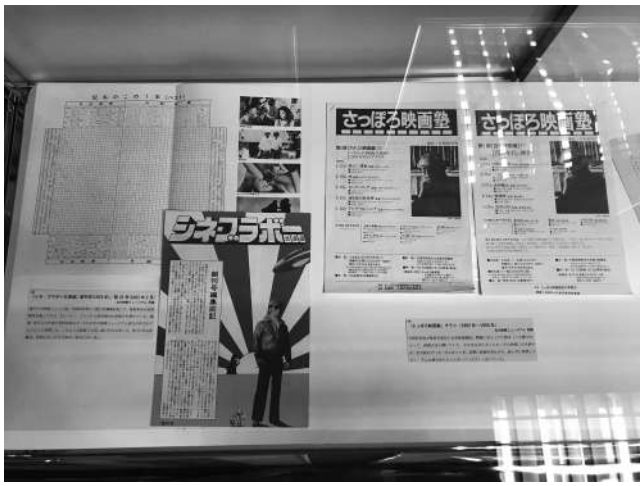
・『侍』『赤ひげ』資料

・東宝マークと東宝マークが写った写真パネル

・『生きる』『雪の断章』『ゼロの焦点』関連資料

・北の映像ミュージアム①

・北の映像ミュージアム②



・北の映像ミュージアム③

・左モニター：令和4年度事業「映画脚本等のデジタルアーカイブ化について」事例紹介／
右モニター：北の映像ミュージアム紹介映像

デジタルアーカイブ実証研究（映画脚本のデジタルアーカイブ化）

■概要

映画資料の保存と利活用のために、映画脚本のデジタルアーカイブ化を実施した。協力所蔵施設内の映画脚本の中から貴重性や状態等によって検討した資料を対象に、劣化進行前の状態の画像データを保存し、所蔵施設内でのデジタル閲覧を可能にさせた。

■作業期間

2022 年 11 月～ 2023 年 3 月

■協力所蔵施設

1. 東映太秦映画村・映画図書室
2. 松竹大谷図書館

■各所蔵施設別デジタル化作業について

1. 東映太秦映画村・映画図書室所蔵資料

▶撮影作業

・担当会社：ナカバヤシ株式会社

▶対象資料

・田中省三氏※1 旧蔵脚本等（溝口健二監督作品関連）　14 点
・田中美佐江氏※2 旧蔵脚本（深作欣二監督作品関連）　12 点
・その他：依田義賢※3 脚本作品の手書き原稿　2 点
合計：28 点

※1）大映の撮影技師であり、撮影監督・宮川一夫らの助手を務めていた
※2）東映のスクリプターとして長年活躍し200本以上の作品を手掛けた
※3）溝口健二監督作品脚本をはじめ140本以上の映画脚本を手掛けた

▶選定理由

平成 30 年度から始まる「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」が支援し、2020 年に東映太秦映画村・映画図書室が開室した。長年東映京都撮影所でスタッフをしてきたため制作スタッフと縁が深く現在は同室を担当する石川一郎氏の尽力で収蔵されることになった、田中省三氏と田中美佐江氏の旧蔵脚本類には、溝口健二や深作欣二といった世界的にも著名な映画監督の作品の創作過程が記録された貴重な書き込みがある。また状態については、前者の資料ではフィルムの貼付、後者の資料では大量の貼付や折込み等があるものもあり、さらに劣化も進んでいて取り扱いに注意を要する。

依田義賢氏脚本作品の手書き原稿は、本人によるものかは不明であるが、他館にはない貴重なものであり、劣化も見受けられた。

今後の劣化、破損、紛失等のリスクに備えて、またデジタル化によって資料が参照しやすくなることによっ

て研究が促進されることを期待して、上記資料を今回のデジタル化の対象資料とした。

東映太秦映画村・映画図書室所蔵デジタル化資料リスト

	公開年月日	作品名	種別	備考
1	1970.09.23	トラ・トラ・トラ！（*Tora! Tora! Tora!*）	台本	田中美佐江氏旧蔵
2	1974.01.15	仁義なき戦い　頂上作戦	台本	田中美佐江氏旧蔵
3	1974.06.29	仁義なき戦い　完結篇	台本	田中美佐江氏旧蔵
4	1974.12.28	新仁義なき戦い	台本	田中美佐江氏旧蔵
5	1975.04.26	県警対組織暴力	台本	田中美佐江氏旧蔵
6	1975.06.21	資金源強奪	台本	田中美佐江氏旧蔵
7	1975.11.01	新仁義なき戦い　組長の首	台本	田中美佐江氏旧蔵
8	1976.02.28	暴走パニック　大激突	台本	田中美佐江氏旧蔵
9	1976.04.24	新仁義なき戦い　組長最後の日	台本	田中美佐江氏旧蔵
10	1977.02.26	北陸代理戦争	台本	田中美佐江氏旧蔵
11	1977.07.02	ドーベルマン刑事	台本	田中美佐江氏旧蔵
12	1982.10.09	蒲田行進曲	台本	田中美佐江氏旧蔵
13	1953.03.26	雨月物語	台本	田中省三氏旧蔵
14	1953.03.26	雨月物語	撮影シート	田中省三氏旧蔵
15	1953.08.12	祇園囃子	台本	田中省三氏旧蔵
16	1953.08.12	祇園囃子	撮影シート	田中省三氏旧蔵
17	1954.03.31	山椒大夫	台本	田中省三氏旧蔵
18	1954.03.31	山椒大夫	台本	田中省三氏旧蔵
19	1954.03.31	山椒大夫	撮影シート	田中省三氏旧蔵
20	1954.06.20	噂の女	台本	田中省三氏旧蔵
21	1954.11.23	近松物語	撮影シート	田中省三氏旧蔵
22	1954.11.23	近松物語	その他	田中省三氏旧蔵
23	1955.09.21	新・平家物語	台本	田中省三氏旧蔵
24	1955.09.21	新・平家物語	撮影シート	田中省三氏旧蔵
25	1956.03.18	赤線地帯	台本	田中省三氏旧蔵
26	1956.03.18	赤線地帯	台本	田中省三氏旧蔵
27		高田の馬場前後	原稿用紙手書き台本	
28		菊池千本槍	原稿用紙手書き台本	

2. 松竹大谷図書館所蔵資料

▶撮影作業

・担当会社：株式会社インフォマージュ

▶対象資料

・小津安二郎監督作品脚本　17 点
・溝口健二監督作品　16 点
・黒澤明監督作品　8 点
・その他　11 点
合計：52 点

▶選定理由

松竹大谷図書館は、主に松竹作品を中心に、貴重な映画脚本を多数所蔵している。その中から利用頻度の高い著名監督作品を中心に、映画政策的な観点からも興味深い検閲台本や脚本の創作過程を伺い知れる準備稿を含む貴重な映画脚本をデジタル化の対象とした。まず小津安二郎監督（2023 年に生誕 120 周年を迎える）作品の脚本資料は、最も利用頻度が高い。そのため、貴重性を考慮した上で、フィルムが現存していない『箱入娘』と現存フィルムが GHQ の検閲により一部カットされている『戸田家の兄妹』、『父ありき』の完成台本、その他作品の準備稿をデジタル化の対象とした。また著名な溝口健二監督作品の貴重な内務省検閲台本と準備稿、黒澤明監督が手掛けた準備稿も対象とした。さらに同館が所蔵するフィルムが現存していない作品や内務省と警察部の検閲台本、字幕台本、準備稿などの脚本も対象とした。

松竹大谷図書館所蔵デジタル化資料リスト

	監督	製作年	作品名	稿表示
1	小津	1935	箱入娘	完成台本　（松竹映画台本集［4］昭和十年（大船4））
2	小津	1941	戸田家の兄妹	完成台本　（松竹映画台本集［32］昭和十六年（大船27））
3	小津	1942	父ありき	完成台本　（松竹映画台本集［34］昭和十七年（大船29）
4	小津	1947	長屋紳士録	[準備稿（手書原稿）]
5	小津	1948	風の中の牝鶏	［準備稿］
6	小津	1949	晩春	［準備稿］
7	小津	1951	麥秋	［準備稿］
8	小津	1953	東京物語	［準備稿］
9	小津	1956	早春（’58）	準備稿1
10	小津	1956	早春（’59）	準備稿2
11	小津	1957	東京暮色	［準備稿］
12	小津	1958	彼岸花	［準備稿（タイトル文字黒）］
13	小津	1959	お早よう	［準備稿（タイトルお早う）］
14	小津	1959	お早よう	[準備稿（タイトルお早よう）]
15	小津	1959	浮草	［準備稿］

	監督	製作年	作品名	稿表示
16	小津	1960	秋日和	[準備稿]
17	小津	1962	秋刀魚の味	[準備稿]
18	溝口	1935	折鶴お千	内務省検閲台本
19	溝口	1936	浪華悲歌	内務省検閲台本
20	溝口	1936	祇園の姉妹	検閲台本 A
21	溝口	1936	祇園の姉妹	検閲台本 B
22	溝口	1940	浪花女	[準備稿]
23	溝口	1946	歌麿をめぐる五人の女	準備稿(60p)
24	溝口	1946	歌麿をめぐる五人の女	準備稿([58]丁)
25	溝口	1947	女優須磨子の恋	[準備稿]
26	溝口	1952	西鶴一代女	[準備稿]
27	溝口	1953	雨月物語	[準備稿・青表紙]
28	溝口	1953	雨月物語	[準備稿・白表紙]
29	溝口	1954	山椒大夫	[準備稿・絵表紙]
30	溝口	1954	山椒大夫	[準備稿・白表紙]
31	溝口	1955	新・平家物語	[準備稿]A
32	溝口	1956	赤線地帯	製作準備稿
33	溝口	1956	赤線地帯	準備稿
34	黒澤	1948	肖像	[準備稿・手書き原稿]
35	黒澤	1950	醜聞(スキャンダル)	[準備稿]
36	黒澤	1950	醜聞(スキャンダル)	[準備稿]
37	黒澤	1951	獣の宿	[準備稿]
38	黒澤	1951	白痴	[準備稿]B
39	黒澤	1960	悪い奴ほどよく眠る	第3稿(青字)
40	黒澤	1991	八月の狂詩曲(ラプソディー)	第二準備稿
41	黒澤	1991	八月の狂詩曲(ラプソディー)	第一本稿
42	伊藤	1921	琵琶歌	字幕台本
43	伊藤	1922	死の前に	字幕台本
44	伊藤	1934	建設の人々	内務省検閲台本
45	伊藤	1935	お六櫛	完成台本
46	伊藤	1936	四十八人目	[準備稿]
47	伊藤	1936	雪之丞変化	内務省検閲台本
48	伊藤	1936	江戸みやげ子守唄	内務省検閲台本
49	成瀬	1933	君と別れて	字幕台本(撮影台本?)
50	清水	1934	東洋の母	[準備稿]
51	成瀬	1949	不良少女	[準備稿]
52	村田	1921	路上の霊魂	愛知県警察部検閲台本

■参考画像

1. 東映太秦映画村・映画図書室所蔵分

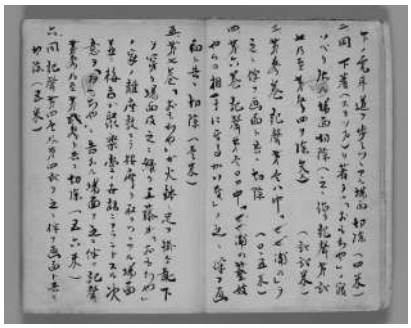
・スキャンの様子

・挟み込みのある脚本

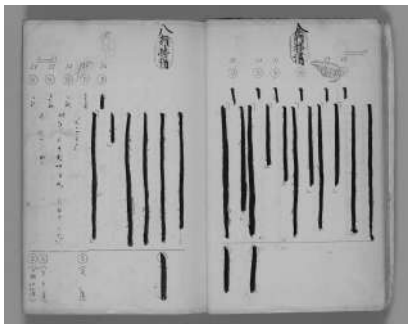
・貼付のある脚本

2. 松竹大谷図書館所蔵分

・『祇園の姉妹』内務省検閲台本①



・『祇園の姉妹』内務省検閲台本②



・『祇園の姉妹』内務省検閲台本③

映画資料所在地情報検索システム（JFROL）の連携拡大と一般公開

■概要

令和４年度事業にて、令和２年度事業からベータ版の限定公開を始めた「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」に、北九州市立松永文庫のデータベースと早稲田大学演劇博物館のオンラインデータベースを連携させ、また利便性を高めるために資料種別の変更や検索方法の追加等の改修を加えて、一般公開の実証実験を行った。

■協力所蔵館

・北九州市立松永文庫　住所：〒 801-0841　福岡県北九州市門司区西海岸 1-3-5（旧大連航路上屋１階）

・早稲田大学演劇博物館　住所：〒 169-8050　東京都新宿区西早稲田 1-6-1

■実施内容

1. JFROL の一般公開に向けた改修について

①資料種別の追加・変更

Ⅰ. 令和４年度の連携と一般公開後の利便性を踏まえて、資料種別７種を 10 種に拡張し、また一部種別の名称を変更した。※以下表の下線（直線）が名称変更、下線（波線）が新規追加した資料種別

資料種別の追加･変更の対応表

令和3年度ベータ版		令和4年度一般公開版	追加･変更理由
シナリオ		シナリオ	
ポスター		ポスター	
プレス資料等	→	宣材等（紙）	プレスシートに限らないより包括的な紙の宣伝資料の資料種別名称とするため
パンフレット	→	パンフレット／プログラム	一般的には映画作品単位の発行物を「パンフレット」、映画館単位の発行物を「プログラム」と呼ぶことが多いが、例外も多く、どちらにも区別し難い資料にも対応した種別名称とするため
チラシ		チラシ	
スチル写真	→	スチル写真等	例えば「ロビーカード」（厚紙に印刷した劇場掲示用のスチル写真）は宣材にもスチル写真にも分類し得るので、より包括的にするため
その他		業務関連	「その他」から独立させて利便性を高めるため
		図書	〃
		雑誌	〃
		その他	

Ⅱ. 資料種別について、映画資料に詳しくない人でも使いやすいように、トップページに以下の各資料種別概要一覧表を掲載した。

映画資料所在地情報検索システム（JFROL）における各資料種別概要一覧表（2023.1）

資料種別	各種別資料の概要・例
シナリオ	映画製作の過程で作成されるシナリオ（映画における場面の構成や人物の動き、せりふを書き込んだもの。台本）。企画～撮影～完成後にいたるまでの段階で各種の稿が作成される。関連資料として香盤（出演者と出演場面等が書き込まれた一覧表）が付随することもある。 ※制作資料としてのシナリオの他に、連携元のデータによっては図書・雑誌掲載のシナリオが含まれている場合もある。
ポスター	宣伝告知のために掲示する印刷物。販売物も含む。サイズは各種あるが、日本ではB2、B 全が基本。
宣材等（紙）	ポスター、チラシ以外の紙の宣伝広報物。例:プレスシート（マスコミ関係者に向けた宣伝用資料）／広報紙・誌（撮影所や映画会社による自社製作作品や、配給会社による配給作品の宣伝のためのものなど）／会社案内／プレスリリース／試写状等
パンフレット／プログラム	映画作品の情報等を掲載した冊子。その内、一般的には作品（上映企画）単位のものを「パンフレット」、映画館単位のものを「プログラム」と呼ぶことが多い。ただし例外もあり、JFROLでは明確に区別できない資料も含めて両者を一つの種別として扱っている。
チラシ	宣伝告知のために一般配布する印刷物。サイズは各種あるが、日本では B5 が基本。
スチル写真等	作品の宣伝写真として専用に撮影されたスチル写真／映画関係の記録写真やポートレート／ロケハン写真（撮影候補地を記録した写真）／ロビーカード（映画館・劇場で掲示するために厚紙に印刷されたスチル写真）／アルバム、スクラップブック等
図書	単行本、叢書（シリーズ）、ムック、冊子、目録、リスト等
雑誌	逐次刊行物（同一表題のもとに、終期を定めずに、巻号・年月次を追って順に継続して出版される刊行物）。映画会社等が発行した広報誌、映画関連の業界誌や通信等も含む。
業務関連	社内文書等の業界内資料。
その他	立体物:機材類／映画賞及び映画祭等の記念品・トロフィー等 紙類:前売券、劇場入場券／楽譜／賞状／手紙類等 記録メディア:音声メディア（レコード、CD 等）／映像メディア（VHS、DVD 等）

Ⅲ. 以下の画面表示項目名称の変更を行った

令和3年度ベータ版		令和4年度一般公開版
作品名	→	作品名／資料名
製作年	→	製作年／発行年

②検索機能の追加

検索機能の追加として、「製作年／発行年」による年代の絞り込み検索機能の追加を行った。

2. 松永文庫 DB の連携

ー背景ー

令和３年度事業で調査協力をいただいた松永文庫には、映画研究家の松永武氏（1935－2018）が収集した映画芸能関連の資料と、映画館経営者の中村上氏（1903－1992）の映画興行資料を中心として、約５万点の規模の貴重な映画資料が所蔵されていることが確認された。そのため同館を九州地区の有力な中核拠点施設として捉えて JFROL への連携を打診したところ、より一層多くの利用者に所蔵資料を利用してほしいという同館の意向があったため連携が実現した。

①概要

松永文庫の館内職員のみが利用していた FileMaker Pro によるデータベースを、JFROL の連携に適した

資料種別に合わせて再分類し Excel データとして出力。JFROL 側で連携プログラムを作成の上、その出力データを取り込んで連携させた。

②資料種別の統一

連携前の状況：連携前の松永文庫 DB の状況は以下の通り。

・館内スタッフ専用のデータベースであり、コレクション整理に主眼が置かれた館独自の分類で整理されていた。

・各資料種別は、一部分類定義に曖昧なものがあり、同種の資料が別の資料種別に登録されている例もあった。

対応：連携に際して以下の対応を行った。※下記対応表参照

・資料種別の整理（変更、追加、削除）

・松永文庫 DB の各資料種別の登録ルールの設定

・上記登録ルールに従った松永文庫 DB の登録種別のデータ修正

松永文庫DB-JFROL資料種別対応表

松永文庫・旧	松永文庫・新		JFROL種別
シナリオ	シナリオ		シナリオ
スチール（写真）	スチル（写真）	※名称変更	スチル写真等
パンフレット	パンフレット		パンフレット／プログラム
プレスシート	宣材等（紙）	※名称変更	宣材等（紙）
ポスター	ポスター		ポスター
チラシ	チラシ		チラシ
業界誌	業界誌		雑誌
雑誌	雑誌		雑誌
本	図書	※名称変更	図書
映画館／劇場		※削除	
興行組合	興行関連	※名称変更	その他
在庫目録	在庫目録		図書
社報／会報	社報／会報		雑誌
会報誌		※削除	
冊子		※削除	
劇場プログラム	劇場プログラム		パンフレット／プログラム
ロビーカード	ロビーカード		スチル写真等
チケット	チケット		その他
ポストカード	ポストカード		その他
CD	CD		その他
グッズ	グッズ		その他
テープ	テープ		その他
レコード	レコード		その他
楽譜	楽譜		その他
付録	付録		その他
新聞スクラップ	新聞スクラップ		その他
その他分類されないもの	その他（映画関連）	※名称変更	その他
	業務関連	※追加	業務関連

③連携作業

上記対応表に従って連携プログラムを作成し、修正した松永文庫 DB の出力データを、JFROL に取り込んでデータを反映させた。

3. 早稲田大学演劇博物館 DB の連携

ー背景ー

早稲田大学演劇博物館は、国立映画アーカイブなどの映画専門機関に先駆けて、第二次大戦前から映画資料を収集している歴史的な映画資料保存施設である。そのため JFROL にとって映画資料の一大中核拠点である同館の連携は欠くべからざるものであり、既に同館で実施しているアーカイブコレクションの公開の方針と連動することで今回の連携が実現した。

①概要

早稲田大学演劇博物館の HP 内の「演劇情報総合データベース －デジタル・アーカイブ・コレクション－」にて公開している様々なデータベースの中から、映画資料の 3 種のデータベース（①映画写真データベース、②映画館プログラムデータベース、③成人映画チラシ・プレスシート資料データベース）を JFROL に連携させた。

②連携方法

今回連携する演博 DB を新たにジャパンサーチ（https://jpsearch.go.jp/）に連携し※、そこから JFROL がジャパンサーチ API を通じてメタデータを取得する形で連携させた。
（※同館では既にいくつかのデータベースをジャパンサーチに連携済）

JFROL-演博DB　項目マッピング

JFROL	演博DB：映画写真データベース	演博DB：映画館プログラムデータベース	演博DB：成人映画チラシ・プレスシートデータベース
作品名	邦題	映画館名	（タイトル）
フリガナ		映画館名ふりがな	
製作年	制作年	発行日	公開年
資料種別	スチル写真等	パンフレット／プログラム	宣材等（紙）

補足：項目マッピングに対応しない（JFROL上の表記項目にない）演博DBの項目についても、JFROL上でのキーワード検索対象としている。

4. 一般公開の実証実験

先述の2館のデータベース連携と利便性を高める改修を経て、2023年1月19日～3月31日までの期間限定で、一般公開の実証実験を行った。

5. まとめ

各資料館 DB 別に連携方法を検討し、松永文庫と早稲田大学演劇博物館の 2 館のデータベースを連携させたことで、18 万件を超える映画資料の横断検索が JFROL で可能となった。またさらに利便性を高める改修を施した JFROL を年度内に一般公開する実証実験を行ったことで、一般に向けて映画資料の利用の機会を広げることができた。

参考資料

・「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」

URL：https://jfrol.jp/

・トップページ

全国映画資料アーカイブサミット2023

■開催概要
【日程】2023 年 1 月 30 日（月）10:30 ～ 17:15
【形式】オンライン開催

映画資料の保存・活用についての知識を深め、関係各所の連携強化をはかることを目的に実施。4 回目の開催となる今回は従来のテーマや議論をより深化させるため、映画資料に係る様々な方にご登壇いただき、多角的な視点で映画資料のアーカイブについて紹介した。

■実施結果
出席者：247 名
各部視聴者数：第 1 部　154 名
第 2 部　174 名
第 3 部　176 名
第 4 部　152 名
第 5 部　159 名
第 6 部　167 名

■第 1 部：報告
「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）の新たな展開」

▶構成・登壇者

1. **JFROL の新たな連携・改修そして次のステップへ**
   事務局　佐藤友則
2. **資料整理のためのデータベース管理と JFROL への連携**
   北九州市立松永文庫　学芸員　凪 恵美　氏

はじめに事務局より、JFROL の開発から一般公開までの経緯と、システムの利用方法、今年度の新たな連携（早稲田大学演劇博物館）についてお話しいたしました。次に、本年度 JFROL に連携した北九州市立松永文庫の凪氏より、松永文庫の資料管理・整理方法の現状と JFROL への接続に係る作業行程についてお話しいただきました。

●凪 恵美様(松永文庫)

■第 2 部：トーク
「映画宣伝デザイナーの視点　映画への道しるべ」

▶登壇者
サイファ。 岡野 登　氏(グラフィックデザイナー)
（聞き手：国立映画アーカイブ　主任研究員　岡田秀則　氏）

長きにわたり映画宣伝デザインの第一線でご活躍されている、サイファ。のグラフィックデザイナー岡野登氏より、まず映画宣伝の制作事例や、映画宣伝に使われる主な宣材や広告媒体の種類と流れなど基本的な知識についてお話しいただきました。また、映画宣伝におけるレタリングの重要性や現代の映画における宣伝戦略の変遷、観客とのコミュニケーション、洋画と邦画およびメジャー作品とインディペンデント作品などデザインに対する事例の比較についてなどもお話しいただきました。豊富な知識とご経験のある岡野氏からの制作過程やデザインの戦略についてのお話により、また違う視点で映画資料を見ることができる機会となりました。

第2部投影用

■第 3 部：セミナー

「ゲーム・舞台・音楽など隣接分野のアーカイブの動向と映画資料の著作権処理と最新潮流」

▶講師

骨董通り法律事務所 代表弁護士（日本･ニューヨーク州）　福井健策　氏

▶内容

映画資料を扱う上でも常に関わる著作権の問題について、権利関係の新たな動向や他の隣接分野の事例についてお話しいただきました。最初に日本のアニメ総合データベース「アニメ大全」の事例をもとにお話しいただいた上、アーカイブ化・DX と各種の権利についてご教授いただきました。次に所在検索サービス規定の射程についてお話しいただき、許諾・非許諾モデルの活用について、舞台映像や戯曲、放送台本、音楽の事例をもとにご教授いただきました。昨年度から今年度にかけて議論されてきた、権利者不明の場合の「新しい権利処理の仕組み」に追加される著作権法改正案（簡素で一元的な権利処理）についてお話しいただきました。

■第 4 部：発表

「映画館の視点　映画館が独自に制作する広報物と観客とのコミュニケーション」

▶登壇者

1. シアターキノ発行「MOVIE LINEUP」について

シアターキノ（北海道・札幌市）代表 中島 洋　氏

2. 上田映劇発行「上田映劇ジャーナル」について

上田映劇（長野県・上田市）編成　原 悟　氏

▶内容

映画館独自の制作物（広報誌やプログラムなど）について光を当て、約 10 分ずつお話しいただきました。次に印刷物を制作する上での予算捻出方法、まずその概要と制作に至った経緯などについてお話しいただき、またデザインへのこだわりや広報物があることによって生まれた観客とのコミュニケーションについてなどもお話しいただきました。最後に広報誌以外の制作物（周年を記念し出版した本や、鑑賞の際に押印する独自のスタンプなど）にも触れ、その制作過程や制作への想いについてもお話しいただきました。現在全国の映画館が発行するプログラムなどは、映画資料の所蔵館でも十分にアーカイブされていないのが現状となっていますが、そのような資料も貴重な映画資料と捉え、資料そのものの認識の広がりや、映画資料による観客の幅広い楽しみ方について知ることのできる機会となりました。

■第５部：セミナー

映画資料のデジタル化に関する基礎知識 非フィルム資料（台本等）の電子化」

▶登壇者

ナカバヤシ株式会社　ビジネスプロセスソリューションカンパニー

図書館ソリューション営業部 林 茂和　氏

▶内容

本事業で脚本デジタル化実施を担当したナカバヤシ株式会社の林氏にお話しいただきました。自社の事業内容や工場、機材の説明の後、資料をデジタル化する意義とメリットなど基本的な知識をご教授いただき、そして本事業でデジタル化した書き込みや挟み込み、貼付の多い映画脚本のデジタル化行程での注意点や対応について、具体的にわかりやすくお話しいただきました。

■第６部：シンポジウム

「映画資料を文化的リソースに－関係者の連携強化と今後の展開」

▶登壇者

モデレーター：

国立映画アーカイブ 主任研究員 岡田　秀則氏

パネリスト：

・世田谷文学館 主任学芸員　庭山 貴裕　氏

・北九州市立松永文庫　学芸員　凪 恵美　氏

・木下惠介記念館（浜松市旧浜松銀行協会）担当キュレーター 戴 周杰（たい・しゅうき）氏

・NPO法人北の映像ミュージアム　理事長　佐々木純　氏

・京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授　木下千花　氏

本年はより広い地域の様々な映画資料所蔵館の方との議論を深めるべく、北海道地区よりNPO法人北の映像ミュージアムの理事長、関東地区より世田谷文学館の学芸員、東海地区より木下惠介記念館の担当キュレーター、九州地区より北九州市立松永文庫の学芸員の方にご登壇いただきました。また、東映太秦映画村・映画図書室の資料整理にも携わる京都大学大学院の映画研究者にも加わっていただき、所蔵館と利用者の双方向からの議論を展開することができました。

各館の活動紹介の後、映画資料の画像等の使用における許諾・非許諾モデルや、著作権に関するガイドラインの現状についてお話しいただきました。また所蔵館間の連携や、ニーズが高まっている映画資料のデジタル化についての現状や各館が抱える課題についても議論いただきました。そのような現状を踏まえた上、モデレーターの国立映画アーカイブ岡田氏より重複資料の提供や全国各地の映画資料所蔵館での情報共有についての取り組みについて触れていただき、議論いただきました。また映画資料を保存・活用していくことの意義について４年目を迎えた本シンポジウムで今一度議題にあげ、若い世代や新たな層へ映画資料についてより広く認識してもらうために今後取り組むべきことについてなどお話しいただきました。

第２回検討委員会　議事録

【日程】令和５年２月６日（月）
【場所】オンライン

【出席者】
検討委員：
岡田　秀則（独立行政法人国立美術館国立映画アーカイブ主任研究員）
森脇　清隆（京都文化博物館 映像文化創造支援センター長）
小林　俊正（東映株式会社 経営戦略部長代理兼コンテンツ事業部映像資産管理室）
井川　透　（松竹株式会社　映像アーカイブ室長）
永島　聡　（株式会社松竹撮影所取締役京都製作部長）
板倉　史明（神戸大学大学院国際文化学研究科准教授）
木下　千花（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
福井　健策（骨董通り法律事務所 代表弁護士［日本・ニューヨーク州］）

オブザーバー：
山口　記弘（東映株式会社経営戦略部フェロー）
梨田　日色（東映株式会社　事業部映像資産管理室長）
御厨　千晶（京都府 商工労働観光部 ものづくり振興課）

文化庁：
吉井　淳　（参事官（芸術文化担当）付参事官補佐）
戸田　桂　（参事官（芸術文化担当）付芸術文化調査官）
岩瀬　優　（参事官（芸術文化担当）付映画振興係）
奥山　寛之（参事官（芸術文化担当）付メディア芸術発信係）

事務局：
特定非営利活動法人映像産業振興機構

岡田：今年度のさまざまな事業は、各面にわたり前年度に比べても充実度が増したという印象を持っています。例えばサミットでは、視聴者から例年以上に多岐にわたり、しかも内容の深い質問や提案などが寄せられているのが大変印象深いです。前年度は下関や北九州での調査があり、そして今年度は北海道でも調査したということで、人のつながりが明確にネットワークを感じさせる形になってきたと、サミットの場でも感じました。

また世田谷と調布の調査ですが、これまで見えていなかった資料が可視化されたことがとても印象深いです。特に撮影所や現像所にあるものは、これまでは誰かがその存在を知っていて保管しているけれども、とりあえず受動的に保存しているだけの段階だったと思います。それを今後どのように能動的な保存に持っていくかということについて関係者や所蔵している方々と考えなければいけないと感じました。

世田谷文学館のようなしっかりとした公的な機関はともかくとして、なかなか映画資料の保存にエネルギーや時間が割けない状況でどのように守っていくか、今後は一緒に措置を考えていきたいと思っています。

森脇：毎年ご報告をお聞きするのが非常に楽しみで、素晴らしい成果が上がってきていると思います。今回例えば東京現像所には同社の業務に関連した資料とは異なる東宝助監督会の資料が保管されており、いわゆる映画関係施設と、企業の中にたまっている情報などの企業アーカイブの部分がクロスオーバーしていると思います。美術館、博物館、資料館がそれぞれ何を旨として収集しているのかは、京都であればその地域や収蔵されるコンテクストはかなり分かりやすい部分があります。しかし企業アーカイブは、われわれ博物館とは少し違う収集の仕方と集まり方をしておりとても興味深く思いました。われわれのようなアーカイブやコレクションを旨とするような団体は、ある意味義務に近いのですが、どのような形で情報化やデジタル化を行い、それをどのように表現し利用してもらうのかという段階にあります。対して企業アーカイブは、どの部分をお助けしていけばその辺が活発になっていくのか、また皆さんが利用できるようになっていくのかも別に考えなければいけないと今回感じました。

小林：前回はこの辺の展開の大体の話を伺ったので

すが、今回いろいろ話を伺い、北海道の話や世田谷と調布地区の話など、かなり具体的な調査が進んでいるとあらためて感じました。それから京都の東映太秦映画村からも、いろいろと資料を実証展示に参考資料として提供し協力できることが確認できたので、非常にありがたく思っています。

やはりそのような形で受動的に見ていただける機会はこれからどんどん増えると考えておりますが、今後こういったものをどのように整理するか考え、能動的に見ていただくような体制を組めるかというのが今後の課題です。前回もそのような話をしましたが、このように資料を集めている一方で、その方法を考えていくことが課題であるとあらためて思いました。

井川：先週1月30日に開催した全国映画資料アーカイブサミットに昨年に引き続き参加し、長丁場でしたが、内容は非常に充実していました。事務局からの結果報告で、開催方法についてのアンケート結果では、リアルよりもオンラインのほうが参加できた、要望が高かったということでした。これは忙しくて参加できないというよりは、やはりこの事業が全国規模になってきたからであり、実際に現地に行くというのも、相当今はハードルが高い状況だと思います。だからこそ全国的なこの連携を考えた場合には、オンラインのほうがやはり望ましい形なのではないかと、今回のこのアンケート結果の報告を聞いて考えました

個人的には、やはりJFROLの有用性を皆さんが感じていらっしゃるので、これについては今後どうなっていくのか、非常に興味深く考えなければならないところだと思います。皆さんもお考えがあると思いますので、これについてはまた後ほどお聞かせいただければと思います。

永島：ご報告いただいた調査について、少しコメントを申し上げます。TOHOスタジオでの「日々スケジュール」「スタッフ表」等がアーカイブとして措定されていますが、これらの「企業アーカイブ」について、当方（松竹撮影所）では、取り扱いルールを決めておらず、作品担当者にゆだねられている実態があります。

また東宝映像美術の美術デザイン関連資料に関連して申しますと、当方では、それらの資料の統一的な保管ルール等は定められていません。まだそこまで作業は及んでいませんが、企業としては、今後の作品制作に有用なもの、不要なものの選別をして、不要なものは廃棄という選択肢をとらざるを得ない状況です。

東京現像所での「同人誌」の保管については、松竹京都、松竹大船の同人誌にまで及んでいることに、驚きました。撮影所システムが機能していた当時のあり様については、しばし先人から伝説のように「良き時代」としての話を聞きます。映画全盛期の制作システム（撮影所システム）からの転換についての各社の進み方は、現業の立場でもとても興味深いところです。

総論としては、映画は20世紀の産業であり日本映画は1950年代をピークとしたある意味前世紀の産業と思いますが、当時つくられた名作の数々は、いうまでもなく現在でも通用する古典だと思っています。いま産業として新たな時代の風にさらされていると認識しておりますが、映像産業振興の一つとして、全盛期に生み出された古典の価値を高めていただき、映画を「歴史」＝「過去」に埋もれさせないよう、あくまで「いまと未来」を志向する運動を志していただきたいと願います。

板倉：まず、JFROLの新しいバージョンを実際に使用したのですが、今年度早稲田大学演劇博物館のデータベースと、松永文庫のデータベースが加わったことは大きいことと考えます。

例えば、私は今、清水宏監督について調べていたのですが、監督名で調べると膨大にヒットし、本当に活用できる充実したデータベースになっていると思いました。今後も活用したいと思わせられる充実度でしたので、一般の方も研究者の方もファンの方も興味を持つ、使ってみたいデータベースになるのではないかと思いました。例えば図書館や大学の図書館のホームページなどで、使えるデータベース一覧など、参考になるデータベース一覧のページを作っているところが多いと思います。今回は2023年3月までの一般公開ということですが、今後長く公開する場合は、そういったところにこのJFROLも加えていただくと、多くの方に使われる、また存在を知ってもらえるようなデータベースになるのではないかと考えており、期待をしております。

調査については毎年新しい発見がたくさんあり、本当にお話を聞いているだけで興奮いたします。たくさん面白い発見がありましたが、例えば世田谷文学館のスクリプターの方の資料については、事務局の調査報告に稲垣浩監督の作品のスクリプターに関する資料が多いのではないかと書かれていましたが、早稲田大学演劇博物館にも稲垣浩監督の映画資料のコレクションがあったと思いますので、そういったところと今後JFROLの検索でリンクすることができれば、まさに横断検索ができる、非常に面白いも

のになると考えております。

最後に、サミットのアンケート結果も非常に面白かったです。海外のアーカイブや資料館などが、どのように映画資料を管理してどのように公開し、そしてその活用をしているか、そういったところを私もぜひ知りたいなと思いましたので、今後そのようなことについて聞く機会がありますと刺激になると思いました。今、本当に充実した活動をされていて興奮いたしました。

木下：毎年のことですが、非常に充実した事務局のご報告をありがとうございました。先ほどの板倉さんと同様に、私も大変いろいろな意味で興奮し驚かされました。ですから、あえて素朴な質問をいたします。

例えば松竹大谷図書館ではいろいろと私も研究で見させていただいたような、内務省の検閲台本などが今年度の事業でデジタル化されましたが、脚本というものは著作権上、例えばウェブでいきなり全部を公開することはできません。一方で発行されてからかなりの時間がたっていることも事実です。例えば溝口健二作品の、『祇園の姉妹』は1936年の資料です。そういったものは、今後どのようにオンラインで一般公開に持っていくのか、もしくは館内のみで公開するのかということに関して、私のよく知っている資料であるだけに新たに疑問が湧きました。

もう１つは、調査で発見された素晴らしい資料を研究者や教育者などの立場として、これからどのように活用し、また社会に還元していくのかということです。世田谷地区のTOHOスタジオの、GHQによって禁止されていた作品のネガ及びプリントが文部省と人事院に保管されていたことがわかる資料など、映画史的にも非常に興味深いことが多いです。もちろん本当に保存されているだけで大事で、それがまず第一歩で、且つそれがどういうふうな状態でどこにあるかを発見するだけで非常に重要です。しかし映画などの振興というところから見て、どのように還元したらよいのでしょうか。研究者の中で還元するのでしょうか。一方で、例えばスクリプター資料というのは非常に面白いですが、スクリプターしか解読できないところがあります。しかし、例えばここで何テイク撮ったのか、またどのようなレンズを使ったのかなども全部書いてあるので、例えば昔で言うところの、DVDの特典映像などに織り込むことができたら、すごく面白いですし、何らかの形で還元されていくことが大事かなと考えます。

それから最後の、私も参加させていただいたアーカイブサミットに関しましては、本当にオンラインでやる価値と意義があると思いました。かなり多様な方々から、しかもこの人はものすごく詳しいのだなという人から、身を引き締めて拝聴するようなご質問がいろいろあり、充実したものに毎年なっていると思いました。

福井：私もサミットに登壇させていただきまして、時間の関係で皆さんの議論は必ずしもお伺いできませんでしたが、今日委員の皆さまのご発言を伺うにつけて、本当にそうだとうなずくところが多々ありました。参加者の増加も拝見し、事務局が丁寧に運営をされている、その成果が着々と根付いてきていると感じました。

やはりJFROLを私も拝見して、それから今回の実証の内容で、デジタルアーカイブの展開が相当進んできていることが印象に残りました。木下さんの発言にもありましたが、これをどう利活用していくのか、どう公開していくのかというフェーズに今後は移っていくのだろうと感じました。

分けても、例えばこのサミットに関して、オンラインでの開催の要望が強かったということです。全国の多くの方々がアーカイブの当事者であり、関心があるからだと私も思います。それはこのサミットだけではなく、アーカイブ全体にあてはまることでしょう。今後アーカイブの公開や活用を考えていくときに、遠隔の方はどうやったらその情報にリーチできるのか。実際には各施設に来場できない、身体的、あるいは家庭的な状況にある人は、われわれが思っているよりずっと多いわけです。そういう人たちがどう情報にアクセスできるのかということを、今後ますます考えていかなければいけないのではないかと思いました。

サミットでもご紹介した、自分が関わっている２つのデジタルアーカイブで、本日も話題が出ていた、脚本に関わることにあらためて少し触れます。

１つは放送台本の日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアムです。ご存じのとおり、10万点以上収集した過去の消えゆく放送台本については、その多くのものは国会図書館に寄贈という形を取りました。そうすると、国会図書館はこの全文をデジタル化することが法律上可能であり、そしてOCR（光学文字認識）をかけることによって全文検索が可能です。今お手元で、「国会図書館デジタルコレクション」と検索していただくと、もう放送台本についても全文検索が実装されていることが体験いただけると思います。（福井氏が自身のPC画面を共有して）これは国会図書館デジタルコレクションのリニューアルされた新しい検索ページですが、全文検索がオプションでもう入っています。私が例えば〈『太陽にほえ

ろ！』、「ボス」〉と検索しますと、このように所蔵資料の放送台本が検索結果として大量にヒットします。ご覧のとおり、例えばページのどこに「ボス」という言葉が登場しているかまで表示してくれるのです。この効果は、もう皆さんもお分かりのとおりで絶大です。

他方で何百点もヒットしてしまうと、例えば今回〈『太陽にほえろ！』、「ボス」〉だけで検索すると3,186件もヒットしてしまい、自分が探しているどの回の『太陽にほえろ！』のどの「ボス」なのかは資料名だけだと分かりません。該当箇所のこのわずか1行の抜粋表示があると、非常に探しやすいわけです。

これはなぜできたかといいますと、著作権法改正によってそれを許す規定が入ったからです。47条の5というものですけれども、つまり国会図書館はそれを活用してこれを実装しました。もちろんその過程で、きちんと放送作家の団体とも情報をやりとりしたわけですが、個別に権利処理を全部やろうと思ったら難しいことを、法律が助けてあげることによってここまでできるのです。しかし全文は読ませません。法律が一部助けてくれることによって、非許諾でここまでできます。そしてここから先は、権利者の許諾を得ることによってさらにこれを目指していこうという、許諾と非許諾の組み合わせをうまく使っている例だと思います。

同じことは舞台の戯曲にも言えます。日本劇作家協会が、やはり文化庁の援助を頂いて、戯曲デジタルアーカイブというものの整備を進めています。これもデジタルアーカイブです。検索すると、これは松尾スズキさんのとても有名なミュージカルで、『キレイ』という作品ですが、「戯曲を読む」というボタンをクリックすると全文のダウンロードが可能です。550本ほどの作品について、戯曲の全文ダウンロードを可能にしています。なぜそのようにするかといいますと、画面下部でメタデータが確認でき上演許諾をご希望の方はお問い合わせフォームから問い合わせできるようになっています。今は作家につなぐことに留まっていますが、劇作家協会は、近々にこの上演許諾の中継ぎまでやろうということで準備中です。戯曲は上演されると上演料の収入が入るので、なかなか売れない戯曲の有料配信にこだわるよりも、無料でダウンロードさせて上演機会を増やしてもらったほうが絶対に得だという判断が根本にあるということです。

利活用の正解というのはこのようにいろいろだと思います。例えば放送台本について、「上演許諾をしますよ」と言っても、少なくとも人前で上演してみたいという需要はそんなにないかもしれません。

では放送台本の利活用のチャンスはどの辺にあるかというと、多分教育や回想法、体験などのほうだろうという話を、日本脚本アーカイブズではしています。利活用の正解は、1つではないけれども、いずれにしても遠隔の人も含めてどうそれを広げていくか、権利者の了承を頂いてここまでできるということと、権利者の了承がなくてもここまでできるということを、どううまく組み合わせていくかが問われているのかとあらためて感じました。

■自由討議

岡田：やはり今年の最大の事業の重要な点として、JFROLが実証実験として一般公開されたことがありますが、これを今後どのように長期的な公開に結び付けるかという課題があります。このような時代が来ると、やはり活用する、それから許諾が必要なモデルの場合は許諾の手続きをスムーズにやらなければなりません。先ほどの木下先生のお話にもありましたが、こうした案件は本格的に増えてくると予測されます。

以前にも話題に上がったことがありますが、例えば全国のどこにどういう資料があるかを可視化する、またどのように権利をお持ちの方々の承諾を得なければならないのかなど、いろいろな情報を載せたある種のポータルサイトがそろそろ必要になってくると考えています。

例えば木下先生、板倉先生のような研究者の方の場合、情報が公開された資料を今後研究で使いたいということがあると思います。そういった場合に求められるものとしては、どのようなものがあるとお考えでしょうか。

木下：もちろんポータルのようなものがあればよいですし、それから少し軽い、国立映画アーカイブにある映画資料と、このJFROLが、何らかの形で一元化されると、とても便利だと思います。完全に一元化するのは無理だと思いますが、今のJFROLのように、1つのサイトで1つ検索すれば連携資料館のデータが全部出てくるようになっているものは、確かにとても便利です。

けれども一方で、今後JFROLの展開については、こういう維持費などがかかるものを今後誰がどのように維持していくかが、必ずしも研究者としてではなく気になりました

板倉：確かにそのポータルがあると便利だと私も思います。ではどこが、誰が作るのか、管理するのかということを考えると、「あったらよいですね」以上

のことは簡単に言いにくいのですが、もちろんそのようなサイトを作っていただけると私たちも紹介しやすいですし、ここに行けばいろいろなデータベースにアクセスしやすい情報が載っていますと１つ紹介すればよいので、良いと思います。

現在私が授業で何か映画について調べる時に、こういうデータベースを利用してくださいと伝える時は、例えば日本映画データベースや日本映画情報検索システム、川喜多記念映画文化財団のデータベースなど、いろいろ個別に紹介せざるを得ません。ですが、そういったものをまとめ、ここにアクセスすれば映画の調べ方やデータベースのリンクが全部貼られているページが国立映画アーカイブのサイトの中などにあれば、大変ありがたいなと思います。

岡田：当館の資料は今のところ一部を除いて、総合的な公開は行っていない状況があります。そこには幾つか理由はありますが、今後それをどのように還元していくかは、当然ながら考えており、結果を出さねばならないと思います。

外国ではどうなのかというのは先ほど話題でもサミットの質問でも指摘されていましたが、非常に役立つところがあります。例えばアメリカの映画芸術科学アカデミーは、オスカーで有名ですが、賞をあげるだけではなくて映画のアーカイブも持っていますし、映画図書館も持っています。１度行ったことがありますが、資料コレクションはとてつもなく種類と量があるので、運営手法をもっと深く学んだり、ヒアリングをしたりしてみたいと考えています。

それからフランスのパリの、シネマテーク・フランセーズの図書館部門も非常に充実していて、フランス国内のシネマテークの図書室の横断検索ができるようになっています。

その辺の歴史や実務なども今後学んだほうが、自分たちにも役立つ時代が来た気はします。

木下：やはりいろいろなことで人員が足りない、人手が足りないということが、実は非常に大きな要因になっています。大量の資料がそのままそこに積まれていることや対応する人がいないので公開できないこと、また権利処理をしようにも手がいっぱいでできないなど、さまざまなことです。アルバイトなどだけではなく、きちんとした正規に近いような形で、要するにアーカイブ事業に携わる人が、さまざまなところで足りない気がします。

私の大学の後輩だった常石史子さんが、当時の東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）に務めている時に、オランダのEYEというフィルムアーカイブに行ったら、彼女が日本では１人でやっていることを30人でやっていたと聞いたことは、今はもう少し国立映画アーカイブで人員が増えたかもしれませんが、非常に印象に残っています。どなたに対してこれを言ったらいいのかはよく分からないのですが、短期間で何か事業をやるだけではなく、もう少し底上げなどができるとよいと考えます。

もう１つは、せっかく映画会社の皆さんもいらっしゃるので、企業の持つ資料についてです。私もアメリカに長く留学していたことがあります。私自体は日本映画が専門なので、アメリカなどでは調査をしていないですが、例えばEYEのアーカイブや、他にもUCLAなど、さまざまなタイプのアーカイブに企業からの寄贈があり、製作についての細かいメモや予算などが入っており、それにより映画史研究が進むということがありました。もちろん企業秘密や、プライバシーである個人情報は課題ですが、もしかしたらある程度時限を切って、例えば戦前のもの、著作権が切れた映画に関してや、あるいは個人

など、何らかのところで線を引いていただけるとかなり映画史研究も進み、もちろん研究者だけではなく、ジャーナリストなどさまざまな方に利するのではないかと思いました。

福井：私からもこの先の進め方についての感想、意見があります。こうしたアーカイブの事業は、もちろん文化事業としても非常に貴重な、未来に向けて遺産を残していく作業ですが、それだけではなく、文化産業政策のインフラとしても根幹部分を成すと考えています。こうしたデータの保存、アーカイブがしっかりしていなければ、コンテンツビジネスを今後十分に行っていけない、そのような要素はどんどん強まっていくと思います。

そうなった時に、人、金、それから権利というふうによく言ってきましたが、この3つの壁がもちろん依然として非常に厚い、高いことは間違いないわけです。そのうちの権利部分に関しては、ご紹介したとおりかなり文化庁さんも努力をされて、できることは広がってきたと思います。また肖像権という権利についても、われわれのデジタルアーカイブ学会のほうで「肖像権ガイドライン」というものを作り、かなり議論の整理は進めてきたつもりです。とはいえもちろん人・金の問題があり、先に進めるにしても、進め方はさまざまだと思います。これはもう本当に岡田さんをはじめ、現場の皆さんのご努力で、われわれなどは少し後ろのほうから応援を差し上げることしかできないわけです。しかし、国の政策ということを含めてここで必要なのは、予算的、人員的な加速、補強でありこそすれ、決して後戻りや停滞ではないと考えます。政府もしっかり予算的、人員的にもこれをサポートしていくという姿勢で臨んでいただければと思いますので、意見として申し上げます。そして、そのために残された時間はそんなにたくさんはないだろうということは、従来から申し上げているとおりです。

森脇：今産業の話がありましたが、これは教育のほうも重要な部分だと思います。われわれはリベラルアーツというのか基本的な教養の部分は、小学校、中学校、高校辺りでかなり詰め込まれます。そこで、映画芸術とは何なのか、どのような仕事なのか、あるいは何が特徴なのかということに、やはり子どもの頃から触れてもらうことは、非常に大事だと思います。映画は、私個人は冷遇されたと思っていますけれども、デジタル教科書などの教育の機会の隙間を見つけてどんどん入っていく、そしてアニメや映画が好きな子がどんどん理解をして、自分が好きなものがどういうことになっているのかを調べられるようになっていくとよいと考えています。

先ほどの利益につながるため産業から文化のアーカイブに近づいていくというのは、ある意味少し見える方向ではありますが、一方で教育は文化に近づいてくれるのでしょうか。近づいてくれないとしたら、教育と文化芸術の間をまたぐ柔軟な共同事業を立ち上げるなど、どちらが旗揚げしたり、あるいはリードをしたりしていくのか。こういうところも次は考えていただけたらと思います。

岡田：映画資料の価値や意義が少しずつ世の中に浸透してきたことは、今当館への映画資料のご寄贈のお申し入れが極めて増えている、という事実として今跳ね返ってきています。サミットでも少しお話ししようかと思いながらもそこまで時間がなかったのですが、印刷物の場合、同じものがたくさん寄贈されるという現象がよくあります。それは雑誌であったりポスターであったりします。そのようなものについては1カ所に同じものが固まっていても仕方ないですし、かといって廃棄することも非常に忍びないのです。そんな時には、全国の映画資料館に分配するための検討を進めてきています。所蔵品の充実を望んでいらっしゃる機関もあると思いますので、こういったことも一つのネットワーキングの形になると考えております。今までも個別にお声を掛けて資料を分配したことがありますが、もう少し公にできればいいなと、準備を進めています。

それからサミットのオンライン開催の件です。オンラインのほうがいいのではという意見が強まっているというお話ですが、私もこの形が浸透し始めていると感じられます。

例えば全国コミュニティシネマ会議では、非営利上映やミニシアターの皆さんが集まられていますが、これは毎年全国のどこかの街を決め、基本的にはリアルで開催していらっしゃいます。この場合は、それぞれの上映の場所を守っている具体的な事業があり、共通の利害もありますから、顔を合わせてリアルで実施している意味を感じます。しかし映画資料の場合は、その性格的に必ずしも顔を合わせる必要はないけれども、意見はいろいろと交換したいという雰囲気がとても感じられます。先ほど井川さんのご指摘もありましたけれども、特に地方の方のご参加が多いという意味ではオンラインが向いていると感じています。

事務局：他にいかがでしょうか。もしよろしければオブザーバーの方からも、何かご意見、ご感想などがあればお話しいただければと思います。

山口：先ほど岡田さんがおっしゃっていたポスター

ですが、東映太秦映画村も映画館から寄贈を受けて、本当にいろいろなやくざ映画のポスターが大量にあります。必要なところがあれば、分配システムに期待していますのでよろしくお願いします。

また、東映太秦映画村が所蔵しているスチルのスキャンを地道にやっておりますが、ようやくほぼ完了しつつあります。あとは新東宝さんのスチルをやれば終わるぐらいの感じです。こういうものもうまくどこかで活用できるようになるとうれしいので、ぜひよろしくお願いします。

梨田：今山口からも発言がありましたスキャンについては、うちの京都の映画図書室だけでも映画資料が数多くあり、それを早くデジタルスキャンをすることで、利活用につなげるという意味合いもあります。先ほど言ったポスターは、東映の映画図書室にあるものだけでも3,000枚ぐらいあり、そのうちの数百枚ぐらいしかまだスキャンができておりません。今のペースですと、本当に20年ぐらいかかってしまうという単純な試算を考えますと、それ以外にも台本などもっとたくさんあります。山口がいろいろ広報活動をし、映画事業自体を、民間企業の東映ということではなく、映像資産、映画の文化自体を底上げするために動いており、そのためにもまずデジタル化を促進していこうと考えています。京都の今のありようは、映画図書室のあり方も含めもっと多くの方にこういったものを知っていただくという意味でも、私どもがどうすればよいかはまだ検討中ですが、会社とも掛け合い20年かかるポスタースキャンだけでも数年内に終わらせたいということで動いております。今、JFROLと私どもの映画図書室が紐付いていますが、それらが今後JFROLに展開すればJFROLひいてはそういった事業全体の底上げにつながると考えております。弊社としても何とかこういった事業に寄与できるように検討していきたく、前向きに進んでいきたいと思っていますので、引き続きよろしくお願いします。

御厨：今までのお話をなるほどと思いながら聞かせていただきました。先ほど梨田さまのお話にもありましたように、こういったアーカイブ事業などの取り組みをまずは知っていただくことで、映画が今まで築き上げてきた文化や伝統などを幅広く底上げしていけるのではないかと思います。特に京都は映画発祥の地ということをアピールしていますので、こういった映画文化を守り、広める活動には今後ともぜひ協力させていただきたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いします。

文化庁：今日は皆さんにお集まりいただきまして貴重なご意見をたくさん頂戴し、ありがとうございました。この事業も５年目ということで、立ち上げからやってきた立場としては非常に感慨深い思いを抱いています。

初年度は京都に調査に伺い、京都府の方や京都の各社の方々にご協力をいただきながら、また木下先生をはじめ皆さんからもいろいろとご意見を頂き、どのような形でアーカイブ中核拠点形成を行っていくかという段階から始めていきました。初年度は京都においてセミナー＆シンポジウムという形で、もう少し小さい規模で行うところからスタートしました。調査の対象も京都から始まり、それが関西圏へ、そして東京も含め４年目は九州・中国地方へ調査に行き、今年は北海道と一応これで全国の大きな、そして注目すべき拠点になっていただけるところを訪問してきたという節目の年でもあったかと思います。

アーカイブサミットもコロナ渦の影響を非常に受け、オンラインという形ではありますが年々参加される方も増え、非常に関心が深いことがよく分かる形になったと考えております。おおむね皆さまからも、オンラインで実施されたことについては高評価でした。全国にあるいろいろな資料館の方々は、必ずしも映画を専門にされているわけではないので、そのために１カ所に集まるのはもちろんなかなか難しいこととは思います。しかしオンラインという形のご参加ですと、その方たちも含めた横の連携のようなものの実感と手応えが、いまひとつ分からないところがありました。

また、今年もIPホルダーの方々の参加が非常に多くその方々はアーカイブ化やデジタルアーカイブに関心をお持ちなのだと思います。オンラインの場合ですと、情報を提供するというところでは非常に多くの方々に参加していただき、とてもよい形でしたが、その中でさらにどのようなところに一番関心がありこのアーカイブサミットに参加されたかということについて、その方々と実際にお会いして伺うことができなかったのは、少々残念なところでもあります。

ただ５年目を迎え、JFROLという形が整い、そこに主要な館の情報をつなぐというところまで達成することができました。横の連絡というのは、もちろんこれまでも皆さん個人的にはあったと思いますが、このような形で各館がお互いにつながる場を持てた意義は非常に大きいのではないかと考えております。

本事業は当初３年でスタートして、その後さらに２年続けてきたという形です。本当にこの５年間、大変皆さまにはお世話になりました。

第 3 章　事業総括

事業総括

文化庁が５年間にわたって実施してきた「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」事業は、日本ではじめて「映画資料（非フィルム資料）」に特化し、その恒久的な保存と利活用の基盤を作る目的で実施された革新的プロジェクトである。映画資料を一言で言えば、映画フィルム以外の、映画にまつわるあらゆる資料のことである。映画資料は、映画が製作され、配給され、上映され、観客やファンに受容されるまでの大きな循環のサイクルのなかで生み出される。例えば映画の製作時に生まれる映画資料と言えば、シナリオの各バージョン（初稿、準備稿など）、香盤表、スケジュール表、セット図面、衣装デザインや実際に使用された衣装や小道具、ロケハンで記録のために撮影された写真など、膨大にある。また配給会社による各種宣伝資料（作品の宣伝用スチル写真、ポスター、パンフレットやチラシ類、販売促進用グッズ、試写状）や、映画館が独自に作った看板や映画館週報なども映画資料に含まれる。それらの映画資料は、これまで一部の好事家たちによって収集されてきたものの、それらを映画文化のひとつとしていかに後世に伝えてゆくかという歴史資料としての位置づけはほとんどなされてこなかった。

これらの映画資料は、従来、国立映画アーカイブをはじめとしたいくつかのフィルムアーカイブや、各地域の歴史資料館や図書館において、例外的に収集・保管の対象になっていた。しかし映画資料は多様な形状や素材で成り立っているため、それらの映画資料の分類法はもとより、適切な保管・管理方法などの情報が十分に共有されているとはいえない環境のなかで、それぞれの機関が独自の方法で管理してきたという状況があった。

映画資料の積極的な保存と管理についての意識が高まる契機となったのは、現在の国立映画アーカイブが2010年に発行した『全国映画資料館録2010』（非売品）であることは間違いない。この映画資料館録の誕生によって、日本全国に多様な映画資料館の俯瞰的な見取り図を手に入れることができたのである。『全国映画資料館録2010』が刊行された前年の2009年に、日本ではじめて映画フィルム『紅葉狩』（1899年）が国の重要文化財に指定されて大きな話題になったが、この映画フィルムの重要文化財指定が、映画資料を所蔵している館たち同士のネットワーク化をうながし、映画資料の適切な保存の意識を高めるきっかけになったことは間違いないだろう。その後も現・国立映画アーカイブは『全国映画資料館録2015』および『全国映画資料館録2020』（令和２年度事業における文化庁との共同発行、後述するVIPOとの共同編集）を刊行し、映画資料館の可視化とネットワーク化に貢献している。

ではより具体的に、映画資料はどこにあるのか、どのようにして残してゆくのか、権利処理と利活用の関係にどう折り合いをつけたらいいのかといった、さまざまな課題が累積してくるなかで、文化庁は2018年度から、「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」事業を開始し、特定非営利活動法人映像産業振興機構（VIPO）が委託を受けて本事業がスタートすることになった。映画資料の抱える課題とは、大きく分けると、保存と公開のバランスをどうするか、修復技術の蓄積や簡易修復方法の普及をどうするのか、また、映画資料情報のカタロギングと横断検索の可能性や、著作権に配慮したデジタル活用と展示をどのように推進するか、といった点をあげることができる。

映画資料の公開活動について、率先して活動を開始したのは、東映太秦映画村の「映画図書室」であった。2020年７月１日、東映太秦映画村は村内に「映画図書室」を無料オープンさせ、カタロギング後の資料を自由に閲覧することができるサービスを開始した。これまで関西屈指のテーマパークとして人気を博してきた東映太秦映画村が、調査研究のための施設を映画村内に作り、しかも資料調査に限り入場無料とした英断は、多くの映

画関係者が喝采を送った。コロナ禍だったこともあり、入室は予約制にして人数制限を行ったうえでの実施であったが、連日のように満室となり、調査・閲覧依頼が絶えることのない人気スポットとなりつつある。しかもコロナ禍にもかかわらず、年間の図書室入室者数が右肩上がりに増加し続けている点は、映画資料を見てみたいという潜在的なニーズがデータとなって明らかになったことを示している。また東映太秦映画村・映画資料室の整理作業には、職員だけでなく、京都大学との共同研究プロジェクトにより学生も積極的に参加しており、それが資料整理・カタロギングの迅速化に貢献している。これも近年大学と地域社会との連携が求められているときに最適な協同作業であり、さらなる積極的な連携が期待される。

本事業の目標のひとつは、映画資料の「アーカイブ中核拠点」をどのような形態で、どこに設置するかを明確にすることであった。現物の映画資料は適切な温湿度環境で管理しつつも、その資料の活用や公開については、最新のデジタル技術を最大限活用して、多くの国民が簡易にどこからでもアクセスできるように、インターネット上に拠点となるデータベースが構築されるべきであるという方向性が初年度の議論で明確になった。

そのために提案･開発されたのが､JFROL（ジェイエフロール）と略称されたデータベースである。JFROL は、複数の映画資料館で管理されていた映画資料データベースをひとつに統合させることによって、一回の検索操作で複数の登録機関の関連資料がヒットし、それらを一画面で俯瞰的に比較しながら見ることができるという横断検索エンジン付きポータルサイトである。

最初は東映太秦映画村の資料データベースの改修から始まり、令和 2 年度に同館と松竹大谷図書館のデータベースを横断検索できるシステムとして立ち上がった JFROL は、令和 3 年度に川喜多記念映画文化財団、令和 4 年度になると早稲田大学演劇博物館や北九州の松永文庫のデータベースまで一括検索できるようになり、登録資料の母数は飛躍的に増大した。筆者が執筆している 2023 年 2 月 21 日段階において、この JFROL の一般公開は 2023 年 3 月 31 日までであるが、この国の映画文化と映画研究を活性化させるに違いない JFROL が、今後、体制を整えて再び一般公開されることが強く望まれる。なお、令和 4 年度事業の一般公開時に諸事情により非掲載となったが、令和 2 年度事業の限定公開の実証実験にて搭載していた一部資料のサムネイル画像は検索時に非常に有用なものであった。それまでは関連資料があるのかないのかを確かめるためには、実際にその資料館に足を運んでその館内限定で使用可能な目録やデータベースで検索しながらひとつひとつ資料を確認してゆくことしか方法がなかった。しかし、期間限定ながらサムネイル画像の搭載は、JFROL で検索するだけで、調査者が必要な資料なのかどうなのかを画面上で判断できるメリットがあった。これは、従来の映画資料調査に費やしていた時間を大幅に短縮してくれるものであった。

また、JFROL に川喜多記念映画文化財団の映画資料データベースが連携されたことによって、おそらく日本の映画研究は飛躍的にスピードアップするだろう。なぜなら川喜多記念映画文化財団の「雑誌データベース」の「特集」欄には､歴代の『キネマ旬報』の目次情報がほぼすべて文字情報として登録されているからである。つまり、この JFROL の横断データベースを使うことで､調べたいキーワード（監督名､作品名など）の入った『キネマ旬報』の記事の収録号数が瞬時に特定できる画期的なデータベースなのだ。

本事業の毎年の報告書を確認すれば明らかだが、JFROL は単に他機関のデータベースを機械的に連携しただけではない。それぞれの機関のデータベースは分類法などに特徴があるが、それを JFROL というひとつのデータベースのなかに破綻なく落とし込んでゆくためには、分類法の再定義や修正が必要であった。ユーザーからはあまり見えることのないこの複数のデータベース連携の技術的な労苦についても、今後情報共有がなされ、この経験が次のステップに活かされることが期待される。

全国の映画資料の所在調査については佐崎調査員の詳細な報告があるのでそちらをご参照いただきたいが、5 年間の調査によって北海道から九州にわたる主要な映画資料保管機関を調査することができたといえる。各機関

に収蔵されている個別の映画資料たちが、今後 JFROL の横断検索によって資料同士の関係性が次々と発見されることになる。そうして個別の資料の価値は何十倍にも、何百倍にも膨れ上がるだろう。映画研究の新たなビッグバンの到来を予感させる。

毎回のアーカイブサミットでもっとも参加人数が多かったのは、映画資料の利活用に関する著作権の解説部分であった。福井健策先生は許諾モデルと非許諾モデルの組み合わせが今後の主流の処理方法になるだろうと指摘されていたのが印象的であった。映画資料を持っている機関が保存のために内部で行う複製も一定規模認められるように近年変化しており、所蔵している映画資料をスキャンしてカタロギングに内部調査に活用するという選択肢が増えたのは朗報であろう。この点は、スピーディーに映画資料を調査し、適切な著作権者を特定し、利活用を進めるためにもメリットがある。毎回新たな発見があり、同時に重要な課題の発見につながるアーカイブサミットは、今後も形を変えて継続開催してほしい社会的価値のあるイベントである。そしてできればフィジカルとオンラインを併用したハイブリッド形式での実施が、映画資料のアーカイビングと利活用に強い関心を持っている全国の参加者のニーズにもっとも合致していると思われる。

映画資料の魅力を多くの人々に PR してゆく映画資料の展示イベントもまた、本事業の重要な役割であった。今年度の映画資料の実地調査とデジタル化の成果を紹介する「実証展示」会が、今年も「映画のまち調布　シネマフェスティバル 2023」の提携事業として実施された。タイトルは〈令和４年度　文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」展示『映画はいかにしてつくられ、そして楽しまれてきたか～最新調査で発見された映画資料展～』〉である。同じ会場では令和 2、3 年度事業にて資料調査を実施した調布市立図書館が所蔵する映画資料を紹介する「出張！映画資料室ーポスターに見る日活・大映の宣伝ー」展も開催された。一般的にはあまり知られてない宣伝資料について、「スピード版」や「プレスシート」の役割、大型ポスターの役割など、各宣伝資料の用途や主な配布先、そしてターゲット層などをわかりやすくキャプションで説明しており、映画資料になじみのないひとでも映画資料の知識と魅了を理解できる啓蒙的なものであった。

このようにキャプションの工夫を含めて、映画資料の効果的な展示方法の工夫はまだまだ改良の余地が残されているだろう。たとえば撮影現場の緊迫感を読み取ることができるような撮影台本（シナリオ）に書き込まれたメモなどは、完成した映画作品の該当場面のビデオ映像とともに展示することによってより効果的になるかもしれない。

いったん本事業は５年の節目をもって次のフェーズに進むようであるが、この５年間で本事業が成し遂げたことは非常に大きなものである。映画資料というひとつの資料のジャンルが存在することを広く認知させ、映画資料の魅力と面白さを多くの人々に周知することができた。映画資料の所有者、IP ホルダー、そして映画研究者と映画ファンたちの活動がひとつの円環を形作って回転しはじめようとしている。5 年間の事業で各種イベントの参加者が着実に増えて、実績も順調に蓄積されて発展し、資料保存のノウハウを短期間で広く普及させることができた本事業には、まだまだ発展する可能性を十分に保持している。改めて本事業の関係者のみなさま方に心からの尊敬の念を表すとともに、さらなる映画資料に関する事業の展開に期待を込めて、総括文を閉じたいと思う。

板倉史明（神戸大学大学院　国際文化研究科　准教授）

令和4年度文化庁委託事業

「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」
（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）
報告書

発行日　：令和5年3月31日
発行　：特定非営利活動法人映像産業振興機構
〒104-0045
東京都中央区築地4-1-1 東劇ビル2階
印刷・製本　：株式会社一九堂印刷所
調査監修・映画資料保管状況執筆：佐崎順昭［日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員］
監修　：板倉史明（神戸大学大学院 国際文化学研究科 准教授）

非売品
不許複製　禁無断転載
©VIPO

本報告書は、文化庁委託業務として、特定非営利活動法人映像産業振興機構が実施した令和４年度「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」の成果をとりまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用などには文化庁の承認手続きが必要です。